史本

三四
春三四

夫木和歌抄巻第三

春部三　題

梅　柳　早蕨　春雨

稲荷詣　春日祭　春駒　遊絲

燕

梅

家集　貫之

梅のはなにほふともちらぬ時の山に夜まさる宿のあるしなん

此哥ハ延喜十六年ニ法皇御屏風ニ大納言家

ニ女ともの庭ニ出て梅花を見又山ニ御まかりて

雪と見るころ花をよめるとそ

家集　躬恒

咲かかりやまとへし梅のにほひつゝきともおもはぬ宿のあるしは

家集ニ　梅花ある家

天元二年ニ屏風　順

朝ぼらけおくる風さへあらけなくそきこし梅のにほひに

大宰大弐高遠

笛の音にもつくるとまれも梅も春の声くへと待なる木し

[seal]　[seal]

此哥も清涼殿の北おもての梅花いと面白く咲たる
しおりに殿上人ともめして花の枝をおらせ
おんあそびしけるに此哥をよみ出たまへる
よみ人しらずとぞ

南枝暖待鶯といふ題にて

風ふかは梅の花咲宮のうちに鶯の[illegible]

祭主輔親

春の手すさびにひくことの緒にさそふ梅か枝に春君

此哥は東三条院の御屏風に初春家居に
むめの花のおもしろくさきたる家居に男客あり
て花をみる所をよめるとぞ

藤原道信朝臣

咲そむる山への梅花にめてては花のたよりに春や来ぬらむ

此うたは藤大納言公任の小白川の家に春の比
道信朝臣きたりけるに花を見て宮のまへにて
よめりとみえ侍りけるよしとぞ

亭子院御製

梅花かさしにさしてもちりまかふ[illegible]

此哥は亭子院の梅花の家の梅花御覧して
いひ付させ給ひける時の哥とぞ

家集に昭純登せらるるて見けるに

中務

香をとめてもとめ見し梅は花咲にけり

家集梅花を

藤原元真

春のよのみさへくらき梅の花にほひさりせはなきになさまし

家集　源仲正

めつらしやかきね（墻）にまつはうつろへきの花枝にさける梅の立え

家百首　民部卿為家

我宿の梅さしの梅の花さきてかつちる風のにほひをそまつ

平貞時朝臣家屏風哥　前参議為経

折りてこむ折その梅のにほひよりすくなきありさま（なく）の枝

寛元二年百首哥の　同

はるふかき風にまよへるさかりまて梅かちるとも香のにほひ

梅花薫暁袖といふ事を

前大納言基家（イなし）

思ひはなつかしきあたりのかくのおもかけを神よりもまさる宿の梅（え）

大嘗会悠紀方御屏風

前中納言匡房

庭へさく春雲山の梅の花かさすかはにほふとさかむめや

梅花中

我宿にいはまくすき梅の花こもりに春ある里の梅の花（大伴宿祢）

よみ人しらす

大伴宿祢村上

同

春霞かすめる里の梅の花のにほひにまかふ風こそすれ

同（之イ）

春三の中家集　従二位家隆

春日野やいつしかものの梅えの花かこそかへ鶯そなく

家勝（？）天王院名所障子

前中納言定家

かをとめによるや梅のしつえにはるへとそ萬葉摘

御集中　　花園院御製

さほ山のかすみのころもなつかしき春の梅をそみる人やなき

万八
神亀四年正月数王子等作歌

梅柳すくらくをしき佐保の内にあそひしことを宮もとゝろに

梅歌中　　中納言家持

万八
ひさかたのつきよにはなくわか梅の花神よはゆきの色にちるかも

同　　大伴宿祢村上

同
ふふめりといひし梅かえけさふりしあわゆきにあひてさきぬらんかも

同　　坂上郎女

同
さかきに梅のはなわけてかくはかりみそのの梅を散らすな

題不知　　中納言家持

万八
うくひすのみな咲くるき梅とひしひとのとけてかへる

同　　読人しらす

万八
なかれたるところにせはみそのふの梅の花はちるとも

同　　中納言家持

万十七
みそのふのもゝきの梅のちる花のあめにとひあかりゆきとふりけむ

家集春部中

一万
浅宮はむらさきそめて梅むなしきまてにはるへても
宮さむしきさきもひきその梅花はさきにけるかも
春の野に咲きし梅の花色をなき梅人
一万五
春の野にうくひすなきて梅の花

万五
風ふけは宮の梅のにほひも我やとの梅の花ちるらむ

家集中　　西行上人

梅かゝを山下とほく吹さそひてこむ人にしめよ春風

雪ところもいそくつむ　同

雪のうちの梅かさね衣袖をも色にはまかせ雪

六帖題新六　梅　信実朝臣

庭の梅たちはなれしも井のもとの梅とや色のまちかひ　よみ人

光明峰寺家三首歌合　梅

よみ人しらす

いつしかの色も人ならぬ春は梅か枝にかきのこしてや山の井にかけ

康平三年三月祐子内親王家名所歌合

かものさとの里　同

春のくる霞のころもいつしかと梅か枝に花咲けるかな

正安大嘗會

宗仲

あふやの色も人いつかさはらんまつさく梅の花をうらみて

布引百首の哥　法親王道覚

山ひめの夜さえわかやきえて布引の山の梅の花

文治六年五社百首　俊成

一木さくまてはいさしらすあやしの梅さく峯をそめける　同

後鳥羽院御手書山ありけるを

あさきりのたちをとめのそてのこゝにふる梅の花

従二位家隆

春雨のふるさとの越前山寺にて

春るきこのもとの色をそへて梅の花

建保三年内裏百首　前中納言定家

梅かゝやたちぬるかたの色のさとみえ

元永元年十月十二日内大臣家歌合

肥前風土記

続後撰

家集　春夜梅樹

春の夜はたちの梅をふく風に袖のかまてそうつりそめける

正治二年百首御会　式子内親王

袖の香によそめの梅もちるとたに花よりさきにうつるらん

同　後鳥羽院御製

梅かえはいまた花さかぬ宿なれはなによりてか風もとひこし

同　隆信朝臣

秋ならは梅さく春の月をみんとてたつる袖は露けし

家集　俊成卿女

ちる袖そ宮ものにほひにけるかな梅の花さへ匂ひ尽きぬる

永久四年百首梅　藤原忠房

色も香もあつしき春はなけれともこの夜はもにうかれける梅

加陽院にて清涼殿の八重梅を　堀川院中宮上総

ちるよりは見さりしものを八重梅はいかなる人のうつしうへけん

御集　権大納言

我宿の八重の紅梅咲にけりしるもしらぬもなへて過くん

見てもなほ色そまさける水の泡うつしゑの八重の梅の花かも

建長六年三首歌会

無品法親王

かきりなきこゝの八重梅色そへて君か千代のかさしとなるらん

同院権大納言家会春夜梅

従二位家隆卿

結ひおく紅のにほひさく梅の花それとも人を袖にかさゝむ

家隆で家に云事の梅　光俊朝臣

春きぬの青柳の好きの梅のくれ仕ての頭もの袖にかけせし

百首歌の中　式子内親王

なかしまにあやしの春まても何けれる宿の梅か枝

西洞隠士百首歌の　後京極摂政

これ程の新揚の梅や咲らん君子庭になく春の心を

建保三年家百首歌の　光明峯寺入道摂政

春毎よまうきの梅の花さかれ枝もこそこの宿もとれ

家集月次歌の中　大宰大弐為遠

梅かよ花かに氷も春さていさくとや折る鶯の声

夫木集梅　清輔朝臣

春くれは花その梅にうつり香よいかなる風の[illegible]人

弘安元年中務で秋王家百首　権僧正頼[illegible]

水茎のあとの墨の梅のなれこそやまことに流れる

文永元年十一月家歌合野梅　同

浪こし清みえまさやらいかん野中の梅の下ぬれ

六帖題梅

折らしの香しを世さんまでそうき里との梅のさかよ

住吉社百首　慈鎮和尚

すみよしのそめのかをりよ梅さけは松風の春の風

文永元年七社百首　民部卿為家

夜の中のつきしかまてさけき梅くしは松さへの中に折らしのはき

朗詠百首寒梅出面雪封寒

民部卿為家　同イ

日影さすまくらにちかきなこりかつくよりも寒の梅枝

嘉元三年十首歌夕梅

前中納言為藤

梅かきの風をまちえて梅かこの中にへたてしきまもるなる

君恋歌合　同

梅さへ花よそにちるくもゐのうへのあかつきまさのとの

乾元二年仙洞歌合春夕

梅の花またちる夕はうちそかへの柳かひきてふかきたる　同

弘安三年春根文百首

安嘉門院四条

いくかへり神よ庭をそうつしかんたかき梅さくる雪のおほ人

文永二年七月白川殿七百首雪梅

右近中将具氏

咲ぬともいかてその雪のうへにもなほまててちるく色なき

仁和寺宮法親王久しき梅花をまつこと

寂蓮法師

あくり返ともしらのとのまて松竹の宿の梅枝

文応二年毎月一首中

民部卿為家

よそにしてかみそへりけるをもちて山稀にうつく梅のはりけり

弘長元年毎日一首中　同

もとのさくら風にさそはれて山ふもとの雪をさへとそなる

名所百首に吉野山春　法眼慶融

みよしのは春ともしられて山ふかき軒ちかき梅の一枝

六帖題　光俊朝臣

藪しけき家をとふ人もなき宿の梅か香さそふ風をまちけり

中務卿宗尊親王家百首　同

初瀬路や尾上の梅の花にほふさとそ春風のふく

続集

春三の中　実明卿女（入道摂政）

こゝも山さとにそありけりいさゝかの軒の梅の香そとふ

家集山家梅　源親房

さかせけり春いくとせをかさねきぬ梅を古木にはるけき

源仲正

よのつねのたまさかにもしき山の梅の匂ひをたきしむ

垣根梅

匂ひくる風も梅の花さそふかきねの梅のいろそかし　同

山田のさとにはくまもなき鶯をききて　能因法師

早春院北野梅

鶯の初音をきくのふるさとの山田の里の梅の一枝　同

まれにきく梅の花かもみえすとも

禖子内親王家歌合　家梅

禖子内親王家宣旨

春きたりしかはあれとそ花をまつ梅にさく

久安百首

郁芳門院あき

引つれて春くる柳の糸にやとりてみえし梅そかし

○新拾遺　藤原為氏

○朗詠傷流
東岸西岸之柳

百首之内　　寂蓮法師

梅かゝはまくらにみちてうたゝねのあはせぬ夢のさむる春あめ

建長八年百首之内　　従二位家隆

灯をそむけてもなほ春のよのやみもさやかにかほる窓の梅か枝

堀河院御時百首　　仲実朝臣

わかやとの八重梅あまたさきにけり花のいろさへゆかしかりけり

光明峯寺殿入道二品摂政家五十首為梅

道のへのくろ山の梅の香もまちかくにほふ春風そふく

同　　法下定兆

同　　信実朝臣

山かけもしはしは花をまちてまたふるさとのこゝろきりそめぬ梅の下風

五十首歌　　前中納言定家

白妙の袖しとそおもふみつむすふみきりの梅のはな

家集廿首之中　　同イ

雲路ゆく雁の羽風もにほふらん梅咲山の有明の空

六條親王家廿首　　同イ

あすかゐにさき梅の花にほふらんいろそふやまの春風そふく

最勝四天王院名所障子　　同イ

今そしる萬代かけて花の香にあふさか山の梅にたくへん

家集湖邊梅　　同イ

ゆふそしるさゝ浪のあまのとまやをかさねてかほる梅の花の香

百首歌

梅もにほへやついつこ霞かくはかる山の松の嵐もさむくよ

風ふけは峯のしらくもの梅のはな色はみえすてにほふ吉野の
まてしはし旅ゆく人のいその杜にうつりやすらん梅のはなかな
家集中右京大夫保季朝臣の許に紅梅の梢を
きしを付をとらへて　参議雅経
吾妹子のきさらき風にちりてのこる梅かゝそ千えけれ
色し　藤原保昌朝臣
鶯のはかせにうめのちりかゝりさえたまかえしそれ
御集開山の梅を懐紙としての題詠
年ことに逢坂山の梅のはなちりかゝるをさきもてゆかん　花山院御製
仁安二年二月清輔朝臣家三会陣去梅
資隆朝臣

会三馬二とぬ題之

三ひまてかゝる宿とやをさひんとおもひしゝ白梅あ
此歌判云寂蓮はつゆおしくもきこえねと三ひ
まてもさひしさうよりて孟母か事をや思ひけん
さてはすこしおもひしりきこゆ講とこそきこえ
いさゝかさひしき事かなし頼政のことはは
うたはことにやさしくこの梅あまきてひとつき
てのちはあさしぬるしはさらにもへしなをなかなと
よ作者きかうちあてゝ孟母のかしこはしゝ
はさてなんかえとしてはおけりきとこそ
家集　経盛朝臣
さえてはいまのかゝりの山のはなさをかはりのゝはれ
此歌も屏風に二月二つ馬よりおりまちて

家集有にある
作者歌有にあり

ともし男女あつかくけりて杜若のもとに女やとむ
またむかしのこそまことならぬとそ

柳

[朱: 万九 古六 赤人 詳]
題しらす　人丸

帷(?)かくもつゝの山との川柳糸をみたれとあそふきみかも

百首御歌　後鳥羽院御製

みよし野の六田の淀の川柳こゝろをくれてきしの岩浪

柳　坂上郎女

[朱: 万八]
わかせこかみらむさほちの青柳を手をりてたにもみるよしもかな

吾背兒我見良牟佐保道乃青柳乎手折而谷裳見縁欲得

題不知　同

[朱: 同]
うちのほるさほのかはらの青柳はいまははるへとなりにけるかも

打上佐保河原之青柳者今者春部登成尓鶏類鴨

家集春雨中　中納言家持

[朱: 秋二 秋上 出]
わか宿のまとの青柳風ふけはおもふ人にもまねきみせなむ

後京極摂政殿のまけける二千首中　藤中納言定家

[朱: 新古今春上 並補六 家集カ]
浅みとり二葉よりみるむつましきいとまをそてにかけてまたみむ

貫之　他本ニ並補ニ　柳

青柳のまゆにこもれるいとなれは春のくるにそ色まさりける

家集　順

霞そめてもこえみえぬ青柳はいかにみけさるらん

家集　素性法師

[朱: 新古今春上 流布本ナシ]
柳をよめる

池水にみきはかけをうつさねと柳の糸はよる人もなし

家集　躬恒

青柳をかさしにさしてわけゆけは春の山人に入人やた

天延三年関白家歌合 青柳

よみ人しらず

春風の吹よるさまに青柳の枝のいと液をみておもふる

東三條にて水辺にて岸柳を

伊勢大輔

青柳の糸を縒りて引舟もかくこそよらし波

基俊

堀河院御時百首 柳

俊頼朝臣

玉のをによりつきぬ縄のもとに川そひ柳風にふかるよ

同

顕仲朝臣

縁手引からそひ楊善く生いは水とれる見に風に任す

同

権僧正永縁

青柳の糸のかゝりもの人まえやさしてそきつきさ二月の風

禖子内親王家歌合 春柳

讃岐

春雨の降そめしより山はやにかはそひ柳色つきにけり

同歌合

小式部

玉ひろいよとられし青柳はまきひかる人あるいは

同

兼房

春雨のふるはに柳をいとはふとかひらそいはきさ

大嘗会悠紀方屏風 青柳社の柳

前中納言匡房

代々を経て春まてかゝる青柳の

家集 柳を

同

○閑話集大和君香
秋四月〔?〕新柳落

さほ姫のかくらきみちもまた柳のいとよりやすく人まちの山　〔世〕

建保二年百首　従二位家隆

さほひめのつかさの山の朝霞にもえてなひく青柳の糸

弘長元年百首歌合　後九条内大臣

青柳のかつらきのさとはあをみつゝ見えぬ枕にのこるらん

西洞隠士百首歌合　後京極摂政

洞河のくまをつかさしく青柳の糸さへ紫もゆる春の日

南小百番歌合　同イ

春風に柳やきしとをちかた人浦にかゝる池のみとり

千五百番歌合　二条院讃岐

春の池門の柳はさへてなひく枝ほそしこそそら寄

文治二年百首　柳　藤中納言定家

続後撰巻〔?〕
〔red marginal notes, partly illegible〕

をそくとも緑の色にまさるさき春くるこその庭の青柳　岸（枝）

吹六人歌合　刑部卿（大輔）

新続古雑上
花よりもまつしりそむる青柳の糸よりかけよいやきはるかせ

家集　和泉式部

見わたせは人まつはしの宮のまへの柳をさりや春の一本

後西園院入道二品親王家五十首　正三位季経

いはまくのまゝや思しきよるみつの柳のあをやきの糸のみたれ

同五十首　閑居　前大納言為家

いはほのいつもしも柳かひくたえての糸よりくる春

家集　法橋顕昭

まとのいつもしも柳にて宿よりそれる春をまたらん

久安百首　大炊御門右大臣

小夜風にかゝみをきさる我宿のいとを柳ともみえてそれ

同　藤原季通朝臣

玉川の岸の園の垣のさゝ柳をもてとらむとてよらん

建保七年顕朝卿家千首柳　光俊朝臣

玉かゝる道のちそのさゝ柳をやまちのまよひとも

寛喜五年女御入内屏風河辺人家垂柳人　光明峯寺入道摂政

山ふかみ人の柳の緑みて深くもみえぬ風そふく

同　前中納言定家卿

深くなる柳の枝の玉つくる春のよちきる宿のはしよ

貞應三年朗詠百首　民部卿為家

青柳乃糸のみたれの玉つけて吹かゝる春の風

柳をよめる　藤中納言為兼卿

風そよく岸の柳のいと乱れなひくもあはれ春の朝露

浄業集柳を　源兼氏大夫

春まつは柳を結ふ小枝の花の森の青柳乃とと

中務卿親王家五十首会柳　権僧正公朝

うき事は柳をあらふ河の浪人さまへを

家集　前明院宰相

河柳の池の柳やよきことにかくもされつゝの乃かけを

家集垂柳臨水　清輔朝臣
さゝ浪の池は浪よる青柳の浅みとりこそ深き朝影

建長七年顕朝卿家千首江柳　源仲業
難波江はよしあしとも青柳は打なひきても出けり玉柳哉

承安五年二月右大臣家歌合水辺柳　清輔朝臣
みなかみは冬こそ越せ青柳をしたしなへて春はきこえし

同　正三位季経
さゝ浪の池のなかまてなひきつゝ浪よりすくる青柳の糸

同　勝命法師
猿沢の池のすそひたす玉藻をもなひきし岸柳

同　正三位経家
乾るてふ川よりみとりのいろをなお青柳の糸

同　後京極院入道関白家
ある宮のみきはの玉柳とのゝもやなひくらん

同　正三位季経
春きぬとうつるみなもとみなきはの春の色かな

仙洞歌合　二条前太政大臣
関こせて川の川の波にかゝりて青柳

同　中納言光俊
飛鳥の飛鳥の川のきしにたえてきしの柳

光台院入道二品親王家五十首岸柳　常盤井入道太政大臣

みつめ色なきしらのきしの柳原千まきのうへに春風そふく
信実朝臣

同
青柳のかつらひ川の春風によるの岸をかすむ流
前中納言定経

同
神なひのみむろのきしの柳陰ともすかさき水の色かな
正三位家衡

新後拾遺 長歌
立田河きしのまかきの古柳いつよりたれて春をしるらん
如願法師

同
神なひのみむろのきしの林柳さかる流に春めさるなり
百首歌
藤原隆祐朝臣

風ふけはひくらしのきしの柳陰下行水も絶えそのとけき

建暦内裏歌合水辺柳

或本誤りて 此歌あるとあり 新後拾遺にて すゝき読人しらすとあり
立田川やまとまてはかかるあまたの色そめにて春の柳
従二位家隆

久我内大臣家にて河辺柳といふことを
あふさかのせきの岩もる水のあやはさかみちの玉もを柳
如覚法師

詠柳
よみ人しらす

万八
霜かれの冬の柳はみる人のかつらにすへくもえにけるかな

六帖題新六
衣笠内大臣

新六
しら浪のよつさの川柳ふかくも春めきさの糸も

同
正三位知家

同
きしかけの水やとみのゝ岡はつりそさてみる青柳の糸

同
春風の氷ふきとく河きしのふかみの柳色付にけり

五社百首柳　　皇太后宮大夫俊成

浅みとり佐保の川への玉柳結ほをれたる人余りこそみゆれ

冬をやめ春くとてのすゝきにみそてまかれ風さそ玉の緒

霞みはけ春の柳いさなひて玉のすかたを見せよ柳

祇園社百首吾柳

その色ひそのすゝといふき乱れとも見えぬ柳の岸のしき

風つよし水の糸をくりかへしても梅の末柳かな

保元三年禁庭柳　　崇徳院

春来れは玉の柳をたちまちに柳のいとやともの岸川に

建保四年百首　　前中納言定家

あさみとり春の都の玉柳多くまたなく春は来にけり

内裏哥合水辺柳

春の日もさらの春柳打なひき乱れたるかな

文集百首梓柳作林

あさみとり柳の一枝やりけむかきのくれは

蘭指新柳渋城墻

この里のもゝひの村のまて春の夕日をよそに玉の緒

寛喜元年女御入内屏風　　入道大納言家

遠く春たる

萬の緑もはるのくれの春のまて人のまへしれる柳糸は

永久元年内裏哥合野外柳

みとりめるは野への柳も打なひきたその春風

建保三年名所百首

水無瀬川まつれ水まて柳まつつゆ見けは流れ糸

同　　　　正三位知家卿

こゝろせは庭の玉藻は青柳の糸によせくる千枝の色なり

十禅師社百首　渡辺柳

雨そゝく宿にはあまたかゝる渡の青の柳は糸ひきそめ

寛喜二年百首　新緑柳　　後九条内大臣

花の色にそめくくみゆる青柳のみとりの山をなかめやるらん

同　　　　民部卿為家

浅みとり色見えそめて青柳のなけ（か）む道は春の色の野

同　　　　正三位経朝卿

春風に春の色そしやなきは此様人のゆきゝの道をひく青柳

同　　　　信覚

青柳のみつはさとの深みとり千々のたくひに春風そ吹

家集　　　　鴨長明

いとけしそいのちもかる柳をそみとりよ糸はかけける

建長三年毎日一首中　　民部卿為家

春雨にかきはらふ柳もみねもあさみとりみえ

春雨中　　太宰

人まてもさ夜の雲の林のあさみとり柳は花のよそに行分

文永二年七月白川殿七百首

前大納言為家

あら川のみとのつきそしいとゝしく春風まつる柳陰かな

百首　　民部卿為家

うちはへてみとりの入江のむ柳露ぬく枝に春風そ吹く

結縁経百首　中将内侍

春雨に氷のくさる柳ねさえみとりの糸まさる也

宝治二年百首哥　行路柳

従二位頼氏卿

道のへのかたの川原の柳かけ春のゆきゝにまちそ涼しき

文応元年七社百首　民部卿為家

乙女子かかよふ川原の柳原絶ぬしむそのたよりはかり

玉まく胡籙をもて春柳のみとりにゆらかなすらん原

春柳の糸よりかくる綾の色のみかきの庭やかくらん

住吉社御百首　慈鎮和尚

すみよしの春の柳のみとりより松あさき庭のもしきまさる色

文集百首　黄鸝語柳　土御門院

春の宮のはつ鶯をとはせは木末にかよふ青柳の糸

賀茂社御百首

片岡の春の柳のいとはやもすゝしくなひくなかきはるかな

堀河院御時百首　中納言国信卿

みとりそに春の柳のくりかへしよき見えなから風そさそふ

同　修理大夫顕季卿

ほかそ山に柳の糸をよりかけて所のきくに風そふくなる

家集春三首の中　藤原家経

うつくしき春の胡蝶の色にみてこゝろにまさる春の柳

建久元年六月百首之中

前中納言定家卿

しきしまや春の柳の糸のまにまつ(?)かせ(?)らん

千五百番歌合　法橋顕昭

風わたる浪の代々にみなかみくる心春柳の糸

家集　源仲正

名にしおふひのくま川(?)の柳なれへてめくる行かはるを

建長八年百首歌合　法印実伊

春雨にやなきの川(?)へのかたゐ井の柳なれは

同　右近中将具氏

三さかひすまにみなせ(?)ともなき柳のあをみなかり

同　従二位行家

青柳の糸のまにまに結ひつゝみをそふみまの春

同　後九条内大臣

行く末の柳の糸のまにまにうちせくくるつま(?)春の露

元久元年詩歌合　水郷春望　正三位季経

名にし川のそひ柳流れけてもあへりや春のさゝ

光明峯寺入道二条摂政家五十首　岸柳　参議雅経

みなみ川けしきそ同しいつ方の春やそれとも見る柳

三百首　従三位(?)

松なき柳の枝もまつみまの里は春のそらみ

宝治百首　春池　従二位家隆

小山田の池の堤の古柳たゝさむしみとりなるらん

題しらす　よみ人しらす

万十四
小山田の池のつゝみにさす柳なりもならすもなと二人はも

百首歌に　順徳院御製

さほ河やおとに河柳風ふけはなみにかゝれるあをやきの波

ひろ河やきしの柳をあらふなみさこそたえぬの糸

千首歌　民部卿為家

風雅春中
きのふ池や池のつゝみの柳ほそ枝もしらすく春雨そふる

なかめやる池の末ちの柳にけ糸はよる春風そ吹

鶯のなくこゑの春もにほふやとの柳に春風そ吹

百首歌の中に　花山院内大臣

玉ほこの道の柳春くれはみかさかりしもまかふらむ

家集田嶋柳　隆祐朝臣

小山田の柳も　打なひくこゝろさへにもけさはしるらん

続拾遺集春雨　中務卿親王

庭の柳の庭ひとしくて春雨つきせす葉末ぬるらん

百首歌の中に　前中納言為家

物よわき柳の枝のなかなかにひき風にもくねりたりそ

嘉元元年十月仙洞百首柳　為実朝臣

下葉のみ手の柳はまてて糸よりかくる春のいろかな

百首歌に閑庭柳　寂蓮法師

行てみる人絶宿の葉のなをまきこめてうち青柳の糸

宝治二年百首　民部卿為家

川柳をくみとめけとめてきりとも水の柳をもとめ

建長八年百首歌合　信実朝臣

青柳の糸よりかけて春ひさけ来る春の風

正三位判者　後九条内府

こゝろやすく春のやまとにかたらん

南かけの橋をまて木ことに風かけて柳の糸

たちかへるひくまのはしへ霞をそへて

[illegible]

宝治中柳　平泰時朝臣

よそへくる露の玉の柳をつかまへて

大宰権帥経俊　堤柳

旅人のさしかくすとも風にはかけて柳

堀河院　同

植柳　宝治百首

ほりてうへし籬の竹のうちより柳をまつりて

建長七年家千首歌　寄柳

[illegible]

よしのゝみちのみよりもとめかねてあひみし柳のいと

前大納言為氏

河柳　光俊朝臣

せきとむる水のみなかみしられけり柳のかけに

水辺柳　経任卿

宝治川はらの川への柳ちりてよる

貞応三年百首歌合柳

かけくれて来る舟の川の柳のいとくりかへしふけるかな

為家卿家百首歌　後二条院

ぬれおけの山さくらさきにけり柳さくらをこきまぜて春の錦なりける

建保六年二月歌合 家隆 柳

春の堀川やみひく玉藻はゆらめきて柳よ春風ふく

元久元年詩歌合 水郷春望

具親朝臣

いそのかみふる川の瀬の柳ぬれつつあをみぬ春の色哉

文永元年七社百首 民部卿為家

いつしかと春くる風にうちひくや古河の瀬の青柳の糸

同

そのかみや氷ふきとけし古川の瀬にくり出す青柳の糸

春かしこ 人丸

新拾遺春上

浅みどり野辺の青柳いつしかと吹く春風にうちなびきけり

万葉十 作者不知年 同

百敷の大宮人のかづらけるしだり柳は見れどあかぬかも

風雅春中 人丸

寛元二年百首 正三位知家

春柳のなびくつれなき白妙に青柳の遠ぞ見えける

中務卿親王家歌合 光俊朝臣

ちひろの春のうちはえてさぬら川はちるひく

文永三年二条歌合五十首 若柳 青柳

寛意法師

ちる門前の青柳井手のしがらみ露のしも

弘安元年百首 法印定円

風春中

吉野川の瀬に青柳なびく春の色見えつつ

家集 修理大夫

川柳さしもまれなれ十すくるそのかぜを月とまてけり

けふの青柳の糸よる柳よ春そむすぶらん

いな物をさけぶけるを月のさすてよめりける

賀茂社百首哥　慈鎮和尚（慈円抜）

このつりせく庭の岩かけはよもやき底こき庭柳　うる

家集庭柳の花をみて　和泉式部

庭柳やりさくへは毛月菜の花とみえわたりけり

選子内親王家三河

池水のはなさけはいとゞ柳かげまねきをそせてけれ

早蕨

題不知　業貴朝臣

岩根にくくたちぬめる人々さわらびのまさしき出る春のなかば

みよしのの山の霞をしるべにてはるの[illegible]　よみ人しらす

禖子内親王家哥合　小式部

さわらびのめもえ出る春の夕霧の[illegible]

同　小弁

はるひかもむすびやかけし山人の野辺やく[illegible]

春の中には　相模

さわらびやもえ出る春のあさ野[illegible]

堀河院御時百首　権大納言公実

春日野の草はみどりにもえ出るを[illegible]

同　中納言国信

春の野のやくともなくてさわらびの[illegible]

同

山の麓ちかきひまきの野辺よりおきいつるわらひ　修理大夫顕季

同

我宿のまかきにもえしやかてくるはるのわかなにしかの下蕨　大納言師頼

同

むさしのゝよこのをひ(むイ)ゆるわらひもえ(出イ)にけり

　　　　藤原顕仲朝臣

家集中

さゝ野のすゝきの下ハひ(とイ)らをさ(ゆイ)うちの　權中納言長方

六帖題蕨

ふるさとの行山畑のさとひとはもたちわかれ(をイ)とけりなれは　衣笠内大臣

文治二年百首

岩根くゝ清水もはるのひとさゝはいたつらや生ぬるわかさわらひ　藤中納言定家卿

百首御歌中

後京極入道二品親王

いそのかみよ野辺のさとのひもとけし雪の浅ちにきえぬる(イナシ)を

百首中

皇太后宮大夫俊成卿

冬枯のすゝきか原をやきつらし早蕨おさしき給や

述懐百首早蕨

みはおやさとの道の下わらひおりをそこらもわかせむ

祇園社百首早蕨

岩根くたちひめへもおもむきわかれもきさらひのはる

文治六年五社百首

たゝめ里ひとのをそのさわらひにおりさすもあやをなし

この冬もはしめちる原の下蕨ひとかたまる年のつまる

岩根の煙をはなるゝ中野山里の下わらひもえこやなるらん

はるのよのかすみのまよりひくまやくものさ　同
つねよりもおもひやそらのさほ山のふもとにもゆるさわらひ　同
六帖題新古　光俊朝臣
ともしらぬ山より入る人さまさはかりにいねをわらひを
堀河院御時百首　権僧正永縁
ちりひめにしそもえ出るさわらひいつかゆかむすへなきものとらん
文應元年七社百首　民部卿為家
あさきのを下萌そくるあひのわかゆらさ　同
山かけのやふまりのもとにわらひをおるよしもかな　同
さゝみちやつひのもえいつるのをまたやをとめのこらひとへ人　同
よそはまたきさめのふかのさ蕨をれぬ時ともおりまゐ

正治二年百首　民部卿範光
春雨のあさかのをのゝつのくみのわらひもえてけさ　同
野をこのしたもえすそのおもきさわらひやさかりすさかしのひとの
家集さわらひ　小弁
さわらひのひをりしも出たるはるせすかやのみのはるともかな
家集
春のくるゝきしのやまへのしたわらひしかえてもとらへ　同
百首奉し時早蕨　源仲正
こゝめるさわらひ萌えいつる山のみねかとの　同
家集早蕨
かひならぬ山のゝめせしわらひをつみしこのさと

久安百首　　花園左大臣家小大進

山伏のいしまのみちさかひなりてこころをゆかぬ雪の路

百首御哥　　土御門院御製

野へはまた雪もきえぬを家つとにつみくる春のわかなひまなし

家集春の中　　従二位家隆

みよし野山ちりしく花の下かけにひさしくすくむ月のかけかな

承久二年四季百首哥の春　山家

霞さへ嵐のさかひにましりもちりける宿のさひし

藤中納言定家卿

文治三年百首

山さとの籬の春の朝ねさめにかへりやかりのこゑをきくらん

樹陰かへりを　　後九条内大臣

咲乃花もやましろ春柳のかけもしまきのさかひ

弘安元年百首

おく人乃袖かる山まさきてかけにそく春の水かき

六年五韻字哥　紅椿高擲夕陽色

前中納言定家卿

山あひのたにのかひなくさしめてきえけるやみむしみのかよ

千首哥　　民部卿為家卿

山人の風木のまに春をまちてかりゆきてのさきの道のさかひ

建長七年顕朝卿家千首

信実朝臣

石くつのおもかへ山の下かけひさしきしもをしらぬからん

家集　　好忠

続後拾遺 物名 (きのふまでの冬こもりせし)
きのふまて冬こもりせしかつらきのやまのかすみもあくるけさかな

家集 三百六十首中
万代 春上
ひまふくやまのいほのかすみよりもはれてはくもりつゝ

如願上人

春雨

家集春歌の中　忠岑

流布本 あつさゆみ春雨しとゝもゆるきのめもえめくろくもはひそふく

題しらす　読人不知

万十 春雨のさくらは見えもありぬへしなゝへにあらはなくよふ

家

はるさめにぬれつゝ袖のをひちて春の日のなかめはまたもまさりける

同 春雨とのみそみむ春雨は花のちりゆくなかとみえけるか

同 春雨にみちをたとりては逢坂のせきのこなたもまよひやはせん

寛和二年三月資子親王家歌合

はるひのゝかすみわけつゝ春雨にいのちしらぬは色そめける

題しらす

春雨のふるひくらしのゆふくれにはれ間の月を霧はへたてけり

建長八年百首歌合　従一位家良

春雨のたなひく宮の青柳はけふみえそめしいとのしらむ

実兼　従入道二品親王

花もみなちりやはせなん春雨のやまぬけしきにうくひすのこゑ

従三位保季

あさみとりこのめもはるの雨ふれはわかきみとりのえたのしら雲

文永二年毎日一首中　民部卿為家

春きぬといはぬはかりの雪けより流れてまさる山の井の水

寛元二年結縁経百首

あら川のきしの柳も春そめしむつましく見ゆる春の色

家集吉野春　大納言経信

うつろへ何あらしても宿ならむ春の色をもとしもけり

南山百首歌合　慈鎮和尚

やきすきし小野の原に春草もえて春雨まれなるをの人

六帖題新古　侍従

下もえのすくろもえて春雨にやけのゝすすき春もあり

春雨を　後一条入道関白

まつひらきのさきの色の春雨にさそはれて春をしれは

建長八年百首歌合　後九条内大臣

いく度かわか宿のなかめをたとりきてたつもいつきき春の夜かれ

文治三年百番歌合　前中納言定家

春雨はよもの木末をそめしかと村時雨をまつもまさる言の葉

千五百番歌合　摂政太政大臣良経

詠むれはひねもすいとゝ山さとの花待比の春雨のそら

文永二年毎日一首中　民部卿為家

さつきにたく春雨の郷しつゝすゝむ花の袖ぬらしつ

弘安二年浮根合百首

安嘉門院家

かきくらしき雲ゐよふ春雨は伴ひけりたえて袖のうへ

嘉元元年百首歌合　前大納言忠良

浅茅原春雨すくる野辺ゆみもとをちとせそたへ

同　後鳥羽院宮内卿

さゝなみやしかのさゝ浪まみてすまさけ(?)春の色

久安百首　前大納言隆季卿

かつくつく波そ花ちるうちそみて春のこさめ

光明峯寺入道二品親王五十首　旅春雨　正三位知家卿

袖あはせてこそ神にもきける霞にかゝる春雨乃空

小野社(?)讃歌合　春山風　前民部卿範(?)顕(?)

山すそひ春雨すむ夕くれのまつのとにかゝる山風

将(?)新撰百首　従二位行家卿

吹風もあくる(?)すさむそてかところすゝる春雨の空

同　後九条内大臣

さほ姫の袖のまさきも霞にあまる夕くれの春雨

六帖題　春の風

ゆふことに(?)夕暮の空すさるゝ春雨乃空

貞應三年百首　春雨　民部卿為家卿

あめきぬ霞まよひて山そけに春ふりてあつまいの下露

霞くとてうらそよみてつゆやこほる風のさそふ春雨

雲くらし日の影は雨中にてなかき春雨の空

建長三年毎日一首中

春雨を花もさこそはさのしめてとふらそゆかしそて

正嘉三年毎日一首中

はるかなる雲の上にも春雨のふるやこの世にもれぬらん

久安百首　花園左大臣家小大進

おもひやる三月の雨やいとふらん氷はとけてひろさはの池

建保四年百首　前内大臣入道按察使

鶯のなけどもいまだふる雪にあかぬ梢に春雨ぞふる

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

春雨はみどりの空をうつしもて時の色をもそむる紀

宝治百首　慈鎮和尚

青柳の糸にまじりて春雨のふるとも見えぬ夕ぐれの空

六帖題　春雨　信実朝臣

まきをこころ衣のつくはけふの雨にかすみそめぬる

弘長元年百首　春雨　後九条内大臣

ゆきのこす雪のすみかもあはれなりひとの春の雨ぞかなしき

建長八年百首歌合　右近中将信家

こころよりおほそらいかにたいかり日よりも春雨ぞ降る

同　信実朝臣

春雨は音のあはれさぞなかけきさるを草のいろ

建保三年名所百首　正三位知家

あはれあはれひとの心を妹ずかせの春雨ぞふる

稲荷詣

永久四年百首稲荷詣　神祇伯顕仲

いなり山しるしの杉をたづねきて人のまゐる

同　　仲実朝臣

いなり山さかきの枝をきねもてすゝたなひきつゝかすまもろもろ

同　　藤原忠房

いなりさかゆくしるしもあらはなみすきの枝のしるしをそかける

同　　源兼昌

をそくらく庭にも出ついなり坂のほるはくるしき人なれ

六帖題　　正三位知家

（私云）いなり山杉の葉をかさしつゝかへるはきさの人

同　　光俊朝臣

きのふきよやつ今日もちものさかしとていなりの杉をもとる家

○春日祭

永久四年百首春日祭　　俊頼朝臣

二月やまさかえゆくやま春日山みねてらしきてにさゝまつく

同　　神祇伯顕仲

春こそはふもとにまて春日山松のさえたもいやまさりけり

同　　仲実朝臣

あめのしたすまさるはるひよろつよの春日の山の神とこそ思へ

同　　源兼昌

鶴るへくそのきの山色月人まあめの下ゆのこつひさかり

同　　二条太皇太后宮肥後

ふもとまつきみかはるかやのこえはたゝさとかすかやまさくらきん

洞院摂政家百首霞

家長朝臣

春日山かとこたちひくしめのうちに春めつるひかりかさそふらん

文治二年女御入内屏風三月春日祭

前中納言定家卿

みかさ山さしけるつひかさしは松かえにかゝる神のいろく

同

隆信朝臣

なをまつることしの山の峯にたつ大宮人のかさしてまゐるなり

同 春日社にて有(百)

皇太后宮大夫俊成

春の日もひかりことにや(にイ)てらすらん玉くしの葉にかくるしらゆふ

遊絲

六百番歌合摂政

後京極摂政

雨はるゝ雲をわけてそひかるかな春のひかりにまつはるゝいと

同

前大納言忠良卿(家イ)

おほつかなかすみのうちにみたれつゝ春のゆふへの人のまかするらん

此歌の判云みたれいとゆふ桜へてなまめかしきされへしとそ

同

慈鎮和尚

立まよふ春の野のわかなにあそふいとのよりかけてまちかねつゝ

同

前中納言定家卿

ゆふされし春のいとゆふくれてたにやみとりの空にきえぬらん

同

従二位家隆卿

春来ぬと人はいへども…かすみもあへぬ…ゆふ

同　正三位経家卿

さびしさや霞の衣ほしつらん春のみそらにあまそゝぐ(?)ゆふ

同　正三位季経卿

此(?)の里のこゝのへのあまそゝぎ(?)…ひさしさびしかりけり

同　寂蓮法師

春風のさ(?)雨にかけて青柳の枝もひとつにあまそゝぐゆふ

寛(?)二年百首　二条院さぬき

ふりそゝぐ池にうつれる青柳の(や)みどりのこゑにあまそゝぐ(?)

嘉元々年式部卿親王家千首題　参議為家卿

雲まより雨のこゑにいみてさりきえて日(?)数てあまそゝぐゆふ

建保三年名所百首　前中納言定家卿

青柳のかつらき山の水白(?)きかすみもみだれてあまそゝぐゆふ

永久四年百首題　神祇伯顕仲卿

打みだれ(?)…あまそゝぐゆふのかはの水をまちや

同　俊頼朝臣

行人のくるもぬれていとゞ…はあまそゝぐさのくちせも…

○春駒

堀河院御時百首　中納言国信卿

いつ(?)ほどもあれ野にはなれし春駒のてもかゝらぬときのまさ(?)

同　俊頼朝臣

とりつなげ玉田横野のはなれ駒つゝじの岡にあせみさくなり

同

春駒のいさむる草もなかりけり淀の河原のまこもはえねは　権僧正永縁

同

こもの江のまこもかくれに立かへり駒そ見えける　祐子内親王家紀伊

家集

まこも刈淀野にあさる春駒のくさにかくれぬ身をやしるらん　皇后宮甲斐

題しらす　六帖

春の野にあさるやこまのさはくらん（今かり…）

延慶百首春駒　皇太后宮大夫俊成

かへりみぬ人の心のうきにのみ水のほとりにて駒のあそふらん

建長七年顕朝卿家千首　野外春駒

（中家）　為経朝臣

[illegible]

こゝ河の長沢野をみわたせは衣かけたる駒の草はむ

千首春駒　民部卿為家

春されは河の岸根のわか草におもひくし駒そむれゐる

まくさあさるかけのこまくさに[illegible]春駒

弘安元年昌根文百首

安嘉門院四条

[illegible]

春駒の水にも草にもあかなくにまたさりもあへぬ人のまかき

弘安五年三十番歌合　河辺春駒　判後成

よみ人しらす

三島江のまこもかくれにあまたゐる春駒の

正治二年百首　小侍従

見わたせは草もあれぬ春の野にあまたひかるゝ駒のけしき

月

従渡ゝやもとおもへ野はまえむ物はいとへそまさうてうか人　源師光

賀茂の社百首　慈鎮和尚

武蔵野の月けのちゝをもんさ入ることの野辺は極らりせん

三百六十首中　うた

冬のひめてかまきの野もむらてえんをえのきさうてえてあとるらまで

大嘗會悠紀方御屏風　前中納言匡房

武蔵野の秋のそらの霞やさひの草は原をそえくさ

野ゝゆゝ人しもす

いまくこまき活えかんなしそ武蔵野あはきそりしおわく秋そ

久安百首　花園左大臣家小大進

○萬葉上

武蔵野はゆくさきのとほれ草の末けをまさしきすゑはきの霞

永承五年十一月俊綱朝臣家哥合読る　能因法師

いかにせんやまのやせまし まこも草をいまさきのはき霞るる

摂政家十首に武蔵野を　俊頼朝臣

武蔵の野よもの霞のはけのえてうい秋さえかさうつしそれ

嘉保二年三月内裏哥合　中納言国信

すみかくもあれはけの武蔵野をさきりさかきり野の人

俊頼朝臣にも武蔵野　兼仲朝臣

よそめにぞむとしこまのき行すて武蔵野の草の原をと

春駒迴　　源仲正

はるやまのいはまをわけてひくこまのはなれにけりなのこま

常盤齋雨中春駒　　同

春雨にぬれて引すけるこまのはなつなはしかしなるらん

為家卿家百首　　従二位家隆

野へにけさひきもよはるゝこまをさへ桜のいろのはなのこまのためたちきこし

文治六年女御入内御屏風春駒

後法性寺入道関白

花の山に春駒さえかへりけふよりかけていくよかふらんさや

貞永三年百首里春駒

民部卿

春くれはまつこゝろさしのあゆみてけふのこゝやまの浜路さしてさして

百首歌に春駒　　土御門院御製

いなのゝをやまとになりにけりいのちのはるの駒もあそふらし

同　　従二位家隆

武蔵野ゝ春の駒ひくこまのなつけさのかけにあまるつくすらん

建長七年顕朝卿家千首春駒

従二位為家

すゝかやのこまをわけやまのはるのこまなりてやかのこのあとはるらん

文治二年五社百首

皇太后宮大夫俊成

なにはなるかつしかのゝすゝきのあゐにはなつかりこまのこゝろまかせて

家集

俊頼朝臣

ゆりつなのみるきさかりにつなかれてこまをはなちてはるのあさ

春駒のあさる沢にあさりしてたちのならふみをさへぞ

家集中春駒　法性寺入道関白

荻のやけ原のこむら野辺の春の月影にまの極みらん

文治二年百首　前中納言定家卿

おちこちや花よりさくも駒に春はあたらしく

同年百首

引かけの野辺のめくむあふさへさこの春も駒あれ

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿

あひこまのわけのとみゆるあふせのまさやふく

百首二の道の人春駒　寂蓮法師

あふいさ若のほえのあはれたてもひくとさあらん

家集久我内大臣女元の春駒

文選古詩
胡馬嘶北風

難波江の汀にあさる春駒はなけもわけはこれあらなり　如覚法師

家隆卿土御門院名所障子

かすみても難波の芦のつのくむを汀の駒も春をしるらん　大蔵卿有家卿

貞応二年当座百首関路春駒　民部卿為家卿

逢坂の山井乃水もとけぬれはけさそゆくせきの春駒

文永元年七社百首

春来ても深田のさなへ駒なへてりそはなれしきは

あくるやきさらきの野への春駒そ

風もゆる春駒のすゑ

燕

帰雁を　中納言家持卿

百十九
つはめくる時になりぬとかりかねは本つくにおもひて雲かくれなく

千五百番歌合　摂政太政大臣

めつらしく燕来にけり雲の上に家ゐしかねてたちかへる頃

題不知　よみ人しらす

かそいろはあはれと見らむつはめすらふたりは人にちきるものを

十題百首燕歌　後京極摂政

燕をもふるすはいかにはるくれてあさちか中の秋の夕暮

同　藤中納言定家卿

燕遇しまきのなかきはるひをやしなふこそつきせさるらめ

建久七年百廿八首歌

はるくれは燕よことなきそのかたなひくはるかなる世よ　同

同元年百首

年をへてつはめきまさしきの住へくゆめをやとそてのちをい　同

文永九年毎日一首中　燕を　民部卿為家卿

二月のなかはまてなき人のみやこにもきけるはかなさ

夕百首中燕　参議為教卿

あたまもの袖のしもまてはるかはれゆめのかよひちもなし

[illegible]

八 [illegible] 國日 [illegible] 春

[illegible] 春吉 [illegible]

[illegible]

夫木和歌抄巻第四

春部四

題

花　遅日　春月

○花

建仁二年五十首御哥　初春待花　後京極摂政

春きてもつれなき花のおもかけにまたしと云へは峯のしら雲

家集花哥中　西行上人

常はなる花よりまさる色つましき山にて枝や春あはれなる

こき花や人にまさるゝ野よりきて山まつり

春の月おほろけなる夜花まつき桜を風ふく

ゆるゆけるをとりて　同

月みれは風に桜の枝なへて花となけ散らまされ

建保二年内裏百首　従二位家隆

この程は知るも知らぬも人ことに山の桜は木

祭ハ山祇ノ祭リ

○まつや咲花○

まつ人も見えにけん

三輪ノ山とニう傍ノ

山神ヲ祭りぬるとアリ

賀茂まつりなとの

まつりことの深れ

百首哥　隆祐朝臣
はつさくら木のもとの神やいかならんけさひらけぬる花のさかりを

夫木集　源仲正
山さくらさきぬといへは行人の千すまひをさそふさかの山ふく

續撰百首哥桜遠情
いそのかみふるき都のはつさくら今もむかしの人まつらん

東北百番哥合　慈鎮和尚
花の香もきよく心をそふるに浅みとりはるめく花のさか川の里

三百六十首中　くした
山さとのかこひにおける花桜あはれそこにとこそ

我宿のいとおもの桜さへ花のにほひとけぬくされいふ

十首哥合に山花を　正三位知家
野辺にしもとそあゆみてすゝき霞あへる山の初桜花

六帖題庭花　信実朝臣
ちりぬともちるとも庭の桜庭もせにうつろふとも

百首哥初花　従二位家隆
吉川あさひの桜いさくさへはなもちまくものつひめなれや

建仁二年五十首哥に山花未遍　俊成女
ゆきわけて風にそちらぬ山さくら

嘉元々年百首花　前参議為相
花は桜ちりてのち山桜まされとものさかりそさく

家集　同イ
いにしへの花をみよ枝にさかりもあらむさきをかほる

雑春

千五百番哥合　後鳥羽院宮内卿

二月や宵けの風にさそはれて咲出る花をまちしと毎夜ん

故土御門内大臣家哥合山家花遅　前中納言定家卿

行末もまださく宵の月のみそてまつらしとけふも山桜かな

同　従三位頼政卿

春ふかき都のよそもしかすがにかくれかもなき山桜かな

此哥判者　基俊云詞すこしも哥よむ春霞もせよとはかり侍るめりとぞ

建長八年百首哥合　従二位行家卿

おとし咲若木の桜まちすぎて待しかひなくめづらしき

百首哥中山寒花遅　源仲正

春ふかき残るとけぬ氷よりこそまださかせてまちさきそむる山桜かな

永久四年百首未散花　仲実朝臣

春くれてのちの家桜はまつまちて花のえだひのくるゝ宿かな

家集花十首中　修理大夫顕季卿

とはゞや咲まつ人桜さくらの手の葉もそくさくるへすかな

家集花乃花といふことを　西行上人

思ひつゝよそをとはせまし付春の花鶴つきせぬ物思ひせい

山家集

こゝろなる宮木の山の花ざかり吉野をこれに移し植ゑばや

家集春哥中　たゝふ孫

春雨の咲わたる事をみれば花のつきとさくわ

流布本なし　イ本六集

百代 花をみて　山田法師

めつらしきわか山桜の花よりもあはれはあはれはゆかしかりけり

続千載 人々あつまりて桜の花のちるをみてよめる

中務卿親王家五十首歌合　権僧正公顕

春あるゝおもふ山桜咲きなはけさもさくやとはまし

百首歌中花　同

あはれより春のおはれのわたるやめかたきよしの山桜

みよしのゝ

新千載 春歌中

あをやきのおほはいつしかみえしより春さそひぬる人

永保二年中宮歌合　藤原資隆朝臣

しら雲のたなひきわたるやまさくらけふもさかりなりけり

三十六人歌合　平経正朝臣

春ふかくなりゆく山にはまたのこる花のしら雲

題しらす　河辺東人

春雨のしくしくふるに高円の山のさくらはいかにかあるらん

詠花　人丸

見わたせは春日の野辺にかすみたちさきにほへるは桜花かも

長歌　読人不知

かすか山こえてさの野辺に桜花ちるこの葉まてよりぬるへ

同

みむろつきをゝ山きりにさくはなのみゆきそめつゝ

同

泉川ゆきめくりぬるいもせ山さくらさかりのさきにける

同

百三 こころをもすみはつるしのいとひ山こころのおくに咲花もなし
寛平御時后宮歌合　読人しらず
まれにくる人もなき山のたちもとりみまれ花よちらん哉
家集　海辺桜花　西行上人
ふきぬくるたにのたかさみよせいかに一しほもはるかなる雲
若和三の中　前参議為相
たかし山花のさかりをせめてそのにほひのこゑをもすみの枝
同　藤原為実朝臣
うつろはく桜によそのほかにもみて花もたえせぬ峯の白雲
建長八年百首歌合　後九条内大臣
岩つたふ花のしら浪いつくよりさしてたえせぬ春のやま風
文永二年毎日一首中　民部卿為家
あさはらく雨のたえ間は霞さて花のさかぬそ春の空なる
建長五年毎日一首中　同
咲花のかけ色にそふ霞もてくもゐにつらぬる花ひもそみち
文永元年七社百首　同
玉雑
うつろふ雨のさむしろの八重桜ちるもみたれぬ春ぞまさる
花さかりちらぬもまてすさめる山桜花の身にしてぞ尾ろうさき
此歌は花のころ病にわつらひて花の盛り侍りける家のまへを車のおとしてとほりけるをききて
永仁二年三月藤原長清家にて若宮社　前参議為相
うらやましうき世のかたに花の後しらぬもけり
花の比歌よみ侍りける中に　中務卿親王

玉春下
見わたせはゆふ日にはへて咲さくらよそのみ山のはなさかりかも
少将祐喜世 小 山城眞

花ひらくあなたこのまに空すみきるの山道やかさなり おもと
前民部卿雅有

花月百首に
後京極摂政 みイ
月清上
花はみよ峯のさくらの桜さかりはさくらの雲のみゆきならん

同
慈鎮和尚

拾玉三
かつらきや高間の山のさくら花さかりのころはそらも匂ふそ

家集すゑの屏風にみやきのゝ花をよめる
恵慶法師

思ふ人あはすもまつはさくらみやきのゝはなのうへの露

中山法花集
東稜蘭白

ちらすてとおもふ心やしらむとはみかきのはなはまつ

新拾春上
百数の歌 や
のみかきはなのにほひをまきさむはつはなゝや か 新拾
大納言経信

山花未落 山イ 同イ
うらうらと山のかすみにしらゆきのしらぬにさくらさきぬる
兼盛

久安五年七月山路歌合花
源頼政

ふかきよしのゝ山もとにかすみのうちにさくらさくらむ

承安元年八月今法師房の歌合花 印イ
法橋顕昭

○天武九年紀祭
竜田神 竜田神

立田姫花のにしきをいそくらしてやまはひろはのかすみもるらむ

此歌の判者清輔朝臣也

さ世の給ひやみ春の夜風もむら神をいはれなき
とつひ村の夜をそむる神をいはひあと心ゆなるあ
あられをちらす事も春のさくらはあはれとも下
く　但万葉集十春雲の立田姫とよめる事侍
やうはかのよおほれし侍らは侍りけるはおほ神也
判者今まてようやれ尖事つらむましきき
とこそ申す也て侍るにこそ

洞院摂政家百首花　従三位範宗
をしなへてこの山さくらまつちかなりまへのまは花の雲のにき

同　家長朝臣
さくらのちりや風のふりこしをもとよりきのみ花の本に

家集花三百首中に　後京極殿

○新古今集下
さほ山のはゝそ
紅葉ちりぬへみ
よるさへみよとてらす月影
○五十二首か本
かけのゆふへを似
つまのかは山すそしに
かゝりにけり
はなちりまてのあすしもまてなと
にほふに
にほふにたえし

散木　続古今　同
しら雲はたゝ木高山の桜はやいたくなりにけりのちの日にすきまのある
さえゝ見みか山のさくらも人はまきてまのさきそと
はなの山は花咲かは遠さのあまのしまのそよ衣なきわたる

家集文永元年春百首中　権僧正公朝
さか山のをちこちなくなの桜も千本ありなにしらくもそみる

六帖題　山桜
あさつまの片山桜さくなる時まちみる人を待つをこせや

家集寛元々年　遠花
たてはなちやこそ出くをまさへ雲なかむこしやさくらはなり

建長二年百首のうり
とは見るあすの山桜はやおもひしはきのたちあまりたりはなくも

柳桜交枝

俊頼朝臣

柳すゑさくらもまじり桜の枝かれてこそ柳の糸もまじりて継り（散）

（○詠山花以之へ　春ぬは花遊み　付くる時きを　いふたり）

見桜（散）

春山もみなみよのわざとぞりけてさくらやかさなりさら

同

六条右大臣

さのすそにみとりはみるもしらいをものはいなを咲

修理大夫顕季

ことしより年の春をさくらの花ありけよふりくるとき

後京極摂政

花咲きてさらに人はいねふうるそ散ひくらよ

あかしまてもしけなくよめつとぞも

都集

春より人中やはき春をすまる思めの花なき事とも

一有家卿

○後拾雑上　大納言経信　後子
すみれなとみなしけれは
なよしけれはかはより
なりにけるかな

此ころは一ふし文の見いに人宗のうへはさくちりすり

みきをわか女房とちそへてくるともとひいまそて

柳わかまよりかけそらにてちるやまさしさくらを

あらしくるかはもくくもにちりぬらくはとそて

文永三年毎日三首中　民部卿為家

吉野山雲のあひの宿しれわかれはるの春はいそらくもと

同二年白河殿七百首　遅花

風春中

旅人の御（[illegible]）花は（同）のえしてさくにまつ春のくれ

建仁三年三月和歌所

中納言定家

花盛霞の衣ほころびて峯しろたへのあまのかく山

柳桜新撰百首

後九条内大臣

まきもくのひはらのいまたくもるよにさくらのいつことあさよかくやま

ロア武本云
天降就神乃香
山未麻非春去来分白
櫻花木晩茂云々

建長八年百首哥合　右大臣殿

あまくたるかみよもしらぬ山さくらちらせ

家集　正三位知家

いつのまにふもとの衣やまよりはちりまかふ山

百首哥合　大納言

桜さくころをもまたぬ山のさくらかな

新千春下

家集　西行上人

かはらぬはこゝろの花をさくらとはおもひける

布引百首哥

布引のたきのしらいとくりかへし

建保三年五首哥合　従三位範宗

三輪山のすきのはらをまつかせそふく

家集　正三位知家

吹風のわかそむる花の色をもきるころの衣の森

八雲御抄花山院に道経かへるに...

家集　東寺...

たのむ春の神をかけたる小野山の山のかすみ

同

桜ゆへこゝろをよするみよし野の山のさくらの

春哥　藤原親経

おもひやるよしのゝ山のさくら花

三十首　後京極摂政

まよふまてはるの若木のさくらさく

続集　衣笠内大臣

春風の山のいたゝきにさくはなの

秀能千五百番哥合

権中納言定家

拾遺下
大方はまよはぬ雲もわかるらん桜の山の春のあけほの

大嘗会悠紀方屏風 桜山松樹更枝 古元 百三イ
皇太后宮大夫俊成

長秋中
松か枝に枝さしかはす桜山花も千世の春やまつらん

文治六年五社百首 同
いとまなくよそのとき山の花さかりさりともすゝみ春の夜の月

水辺落花
権中納言大夫

金槐
桜花ちりかひかすむ春の夜のおほろ月夜の賀茂の川風

文治二年百首落花
後九条内大臣

風ふけは花はいくへのさくら川なにはかさねて水の春かな 同イ

河

拾遺愚草
玉川や岸のさくら胡蝶なく散るも花やおりかはるらん

家集
正三位知家卿

新
ますかゝみ清瀧川の底すみてくもりてもちる花の白なみ

治承二年右大臣家百首
皇太后宮大夫俊成

長秋下
たつた川花やちるらん天の川雲のつきとも見えすなかるゝ 山(長)

文治二年百首
源師光

花の色をひとつにこめて天河みなかみやまさくらの山

拾遺集花歌中
権中納言道家卿

又金葉集同く [illegible]
かつらきの山雲井に花のちる時はあまの川なみたちかへりけり

家集落花歌
西行上人

山家
木のもとに旅寝をすれは吉野山花のふすまを着する春風

花三首中に 同イ

△於玉葉集に四季ナ
雑各千首　於玉六
都合自自とありて
日吉社へ六文字ナリ

ときはなる花もやあるとよしの山おくなく入てたつねてそみん

日吉社百首倭哥　慈鎮和尚

よしの山雲のたえまよりちる花は風よりおつる瀧のしら糸

の花ナリ（板）　同イ

百首倭哥の

みよしのの山は桜の花さかりもとめてなきかたそなかりけり

同イ　慈円（板）

△契天台花園右大
吉野山花同世
何集歟

続千載集巻第一　春哥中

よしの山月まちいつる有明は雲かとそむかふ峯の花の

正治二年初度百首哥　非参議為相　おイ

○五十二
冬山の七首か
相当リ左右ニ

咲まし花の光をくらしける玉松の峯の一むら

新後拾遺集にける百首哥の　法眼慈融

玉葉集春上

雲晴にこしのを花のさきにて吉野にかゝる山さくらかな

春月を　常盤井入道太政大臣

○吉野山歟花園
おかし書歟

みよしのの峯の花さへ風ふけはけふまてのこる春の夜の月

百首御哥中遅花　後深草院御製

○春の部
花まさにくるゝをまちしよしのの山桜いつかさくらん

新続古今百首哥中　後京極摂政

よしの山法の楊よりちる花の峯の嵐にさそふみな

後鳥羽院秋歟

百首倭哥　光明峯寺入道摂政

吉野川岩切岸の桜めさくらの浪にたえぬ花をか

百首倭哥　後九条内大臣

○五十五　吉野山時
八隅知之
吉野川渡舟

吉野川大宮人や朝ゆふにみるにてくらさぬ花をこそみん

花の香をそてにとらへてよしのなる　西行上人

○秋葉
神前

山桜よしのまうてのはなのしるしをるにつけても神まつるなり

稲子紀訓

花三の中に

今もなほ昔をかけて郭公やよしのの花に宮のめぐり　めぐ　同

老若五十首歌合山花

如願法師

みよしのゝ高山さくら春毎に心をかけてかゝる白雲

家集山中花　古来歌合

後京極摂政

風雅　春中　千五百番歌合　千二　玉　千六上ハ　山中花のみあり

ゆくすゑの花のまとゐてしら野山たなびく雲の絶えぬまきまん

河内　明玉

平泰時朝臣

春さけてきのふとくみなかみの花の白波ちるらん

家集花三中

西行上人

水上に花の雪やさそふらんしら野の川のみなかみはまさろ

建保三年内裏詩歌合　二

千五 建保二年内裏歌合とし 題不審 三百首あり 建保三年 内裏 名所 花 二年 百首 千五百番 建保二年とあり

後京極摂政

よしの川さくら吹まく山風に岩ねの水もいろにぞありける

同

大納言経通

花イ

時しらず春のゆきさきに雲さへちるやせの桜木

七百首三の　千五　宝治春五百

権僧正公朝

みよしのゝ春のあけぼのちりて枝もやとさらのさかへけん

花月百首　抄　後撰名所

藤中納言定家

花のしくへ色をよそにもみて春はみよしのゝ色をさき　色こ

洞院摂政家百首　同イ

西園寺入道太政大臣

ちとせふる代々の桜をよそにみてよしのゝ山を宿とさだめん

千五百番歌合

花さかて雄みちの山さくら花もとほりの錦つけたり

あかなくに花の横雲明そめてさくらにまかふみよしのの山

同　源具親朝臣

春の夜の明ゆく山のたかねよりそむきさき花の横雲

承元元年天王院名所御障子

俊成卿女

みよしのの花のさかりをけふ見れはさくらにまかふ春の山人

貞応三年一字百首　民部卿為家

雲はみなたえまの風にみたれつつ花のさくらにかかりつつ

永仁二年内裏三首歌　盛久

前中納言為兼卿

ちらぬまは風のいくたひ花まちし雲のうへに入る

続集　元亨三年　常磐井入道太政大臣

みちもせにちる花をみかりの岸のほかの花の白雲

嘉元三年　参議為相卿

立まよふ花の白雲さくらにもしられぬ山

久安百首歌　皇太后宮大夫俊成

長歌

あしひきの山のまつよりいまはともわかさともわれそさくらそ

六帖題にて　中務卿親王　続今

春をへてあまたかはすこなたの花のやさしき

建保二年内裏詩歌合　河上花

民部卿為家

吉野川さくら波の春の風枕をやのめの袖の香そたつ

永禄二年百首歌　同

さくらちるおちのさとひとあすからやなかれに盛の春をみるらん

建保二年内裏詩哥合河上花

俊成卿女

あすかゝはせゝに花盛おちすくいはをみきつよきの名にたつ

後京極摂政家詩哥合落花隨山風待寺

合初之

前中納言定家卿

玉簾内にしみとも花をやめのそむる衣にかよふ陽春風

建仁元年五十首哥也

初瀬川いかなる春の名のみそ花のいつよりかひくらん

嵩山花

みよしのゝ雲のよそにて咲嵐のさそふ花をなかるらん

河邊花

大井川やそせの浪の春の色はかりしく花の関とこそみれ

同

後京極摂政

大井川波と花との道すからやそせをわけて春そなかるれ

後京極摂政家下名勅使にて大井河にまかりて詠し

くる時は花ともまてしよめつところそし

前中納言定家卿

えはそめぬをやすゝの宮あらしにかり積さき花のうけゝき

建保三年詩哥合

従二位家隆卿

しらくもの山おろし嵐やすてころを川瀬の浪に花そちりける

九条内大臣家同題詠也

雪とちるしらしのなかし大井川せきをかりし花のなきか

河上落花

菅木田延季

信明集異本
印本並元
後頼イ
ちイ
月日はずくら

楓多よ水を深み神風やいすゝ川の岸の夕露
家集　源信明朝臣
いつとてか道ある代々にわきてくもる春の色あさき
家集うつしに侍りけるもとを　源顕大夫兼季
花ちると神路にてらす山わきさくら深くをしみ風もなし　まてよ
三嶋社奉納十の歌中　歌枕　寄君
川むかひゆきとる山の里も楓まれにても人哉よ毎に
家集　権僧正公朝
布留山の岩ねよ世々ふる楓露のしらをえしこた
建保三年名所百首　正三位知家
前中納言定家　ちし　文治

秋篠の上
芦の屋の仮寝ひとよを楓の子のすむ人そさし大宮
御集春元百首中　従三位範兼
月日
わか代のみさの垣やさいと思ひやなれ楓なさ　人
百首歌中　前大納言為家
同イ
神の庭のみさの垣風の山に花にまちて露に
光明峯寺入道摂政
同イ
さかふの神の宮山の音風にも花をさそふむさ狭の三月
建保二年内裏十首歌合
花の香にありとやこのよそ神の宮山に鶯の鳴く
従三位範宗
建長八年百首歌合
後九条内大臣
花盛さのえをさそふ木の本にまくしこの山里にみなかみ
山(?)
かくれ
かくらのちら

古今集上
ほりかはの細きつらちよ
白妙の花の色をあかね
こころえくらのちら

此哥判者知家卿云ひてしの山みて春を暮り
てやつし侍り

建長八年百首哥合　光俊朝臣

いつのまに花咲ぬらんをとこ山みねをこえたるのはなさかり

判者知家卿云をとこ山峯をといふ言葉に侍るよ
や深きまかひ侍るへきよくいひつゝけられて
こそ侍れとて

家集花三首中

さくら花しら咲ぬらし春のきのこ山のはへは雲のかゝる

三百首集御哥　中務卿宗尊親王

行くら咲ぬらしみねの山の山さくらひとへをわけて白雲

十首御哥同隔花　亀山院御製

吉野山霞の隔のあけほのにほのめくは花まいくへかかるしら雲

光明峯寺入道二条摂政家五十首隔花

前中納言定家

明てまたそれとそみるさくら花かすみの奥の雲の峰まて

同　権律師隆昭

きえみえさくら咲山風にをりふす花のゆくへの雲あり

嘉元元年成範卿家哥合霞中落花

法橋顕昭

霞こめて見もそ風をまかせちりしく花や霞の雲

同上の合判云

身の居云大夫入道殿也

行くほとに人の色をまちわひて霞の雲のよそにやちるらん

春ふかみせきもちりしく花にのみいはゝ吉野の山のあらしに

哥林苑哥合関路落花
右大僧正覚忠
うけせきとめて花を散すらむかひもなけき関の岩かと
後京極院入道二品親王家五十首関花
西園寺入道太政大臣
山さくら花のちるをもとめて海あまもなき関の関の関のせき
家集　忠盛朝臣
吹風のをさへそのはるの関は桜ちるらくをもにさきぬらん
為忠朝臣家百首
安集礒邊桜　源仲正
かめのこらゆての磯まちりくる花さくもあさりやまき
花の中　少将内侍
まつふうみのはるの人とひくすゆめの風はちらずしも

五十首哥の　前中納言定家
さくら花たゝ世のかの木すゑ遠く一夜の関屋ゆくにそ
桜ちるよ空の山風仮の関の春きはにあるらん
洞院摂政家百首花　大納言経通
花の香をしたふよとめよ桜人の衣の関の春の山風
後嵯峨院入道二品親王家五十首関花
正三位知家
さくら花衣の関のその風よかせきもの花のちるそ
正治二年百首　寂蓮法師
山のはもあかりまたきにふる雪も花そちる
千題百首　前中納言定家
宮こよりこゆる花の関のやらん月

正治二年百首

春のお花の錦のそてぬさとするまてかそらふく嵐かな

拾遺集 伊呂波字七首

るの錦を花のかりこそ春なれとあはれしらなむ風と

家集春之中　能因法師

おりのをくさめきまいさくら花ちらすて山の風ははけしき

後京極摂政詩哥合 花深山　源具親朝臣

しらくもをあきさと檜の山さくら花と月との有明の空

建保元年内裏詩哥合 山寺花夕　前中納言定家

時あらせし色にはまかふ立田の峯の紅葉はも

千首哥

立田山みねのさくらちりそめて木の中なる鳥も花なかるなる　民部卿為家

宝治元年千首哥合　常盤井入道太政大臣

あまのいはよ我をもいその立田山たえの花も神まつりてき　太宰権帥為経

同

春の源の立さかさきへ嶋の上をさまの山もる花盛りを　源金大夫

百集 屏風 崎の

嶋の上らてもの山さくら風ははるさきてそ花ちりける

宝治二年百首　後九条内大臣

水附さいらくやまの山さくらそれのひりそこはなる

洞院摂政家百首　正三位知家

明むかし

おもの乎是いたらきの山さくら一夜よおりくもいこれ

家集　　　　鴨長明

三句株

ちりはらさいはのをそさくらわかれ行き見とこそすきあかる

家集晩山花　　　　法橋顕昭

みよしのの水上たかき山のたきつせ白波の花ぞちる

桜

とひ来つるひとやゆきてふるさとの人をまつらむ山さくらかな

大神宮百首法楽　　　　後鳥羽院御製

ほのぼのとひらけゆくさくらのはなのこかけさえてもにほふ

御集花歌の中　　　　後徳大寺左大臣

しら雲の山のまつかせのこゝろもそらにまかせても花そちるらん

家集花歌二首二の中

よしのの峯の桜や咲ぬらんかねても花の白雲のかゝる

石清水三首歌合春山花

家長朝臣

いつしかとまちもつけしかつらきの山の花のしら雲

同

法印耀清

かつらきや高間の桜さきにけりたつたの山の花のしら雲

建長八年百首歌合　　　　後九条内大臣

あさかのの山しまかつらきの山さくらこれはかすみのあけほの

家集

従二位家隆

八幡山さくらはさくらさきの山かすみの色ぞかはらぬ

春歌の中桜

洞院摂政

いこま山あたりの雲とみえぬまでははるかに桜花さくらむ

花の中　　藤原有綱朝臣

いにしへにまさりけるかな桜花雲と人やなるらん

文永二年七月白河殿七百首　林花

咲きみてる雲のたちまよふ伊勢山の花の中の雲のあはあは

遠見山花　　中務卿のみこ

いつまでか花咲ぬらし雑踏にさきそこ出て見れしら雲

弘治元年百首花　　後二位行家

なかなかに人めかりけみてん雲かかる伊勢の桜かも

家集　　正三位知家卿

降雪よ花の林のいさま山もとの雲まてもうつるかな

同　　仲実朝臣

こころもとなやことまくのにほはまほしかくさくら花

永仁大嘗会　　後光能朝臣

すめらきの御代の山の桜もさかれる雲のまそえけき

近衛院大嘗会　　左京大夫顕輔

八千とせてくらの白雲山のこころ花の折りもやさかるらん

正應大嘗会　　民部卿資宣

ときはにつま立むかし雲のむかしさかりていてぬらん

百首法守　　慈鎮和尚

葛城や山のきき霞をまとけ入の雲の花の

さらにたかまと山の花盛雲とこつつ

法輪百首寄桜述懐　　源仲正

春のちの一枝りまいあひ

家集　後柏原院

こまち山花ちりかゝるさくらのもなにいはれこそ[illegible]

けさこそは花もさきのなみにもなりにける[illegible]

屏風哥二月　元輔

いつきまもいつくのきりいろとひしに花そちらん

家集　大宰大弐高遠

ひまもなくつゝめる山の千草のかにやあるらん

あかつき花　順

鏡山さけるさくらのはなひらをいりてあらはらむ

建保三年内裏哥合山落花　従二位家隆

ゆくもあくや嵐のあしたの山さくらはなさそふかせ[illegible]

山

従二位行家

あらし山花のゆくへもしられすや[illegible]

花月百首　慈鎮和尚

ゆくへ山さけきさくらを[illegible]花とたのまし

家集春哥中　惠慶法師

嵐まよふ[illegible]

家集　和泉式部

まちきなる花みるとや[illegible]一枝はありてん

灯のおほろ[illegible]

花月百首御哥　後京極摂政

村雨の[illegible]

仙洞五十首田家春　同イ

あはれにていつ田の津よふ苦の見えつの家も花さき(?)にけり

喜多院入道二品親王五十首

従二位家隆

あさ霞花かきこもる有明の山さへそらにさくらの陰

家集二位中将殿五十首和哥の

如願法師

春のあけほの都の人はまてしとこ志賀の浦路の花の山風

花月百首哥の

慈鎮和尚

山里の峯の白雲ちりぬれは花みし人をまちそかねつる

風をいとふ山こそ今は我なれや花のしからみ流れてきえし

應和二年三月[illegible]子内親王哥合さくら

よみ人しらす

山里の桜はまいりて白雲の色かへてこの山のさくらは

永暦元年七月清輔朝臣家哥合にて

法橋顕昭

わきもこかこえ山の花いまさかりちりのまかふなもとそ

寿永元年十一月[illegible]百首

為実朝臣

あらし山ちらぬ桜の花の名残それかあらはそれも

花の哥の中

山階入道左大臣

咲そむる梢の雪を山のはにくもるとてみる年の春かな

建仁二年五十首哥の田家春

慈鎮和尚

櫻さく山田の原のむらはへり秋ならすともいなむしろ人

家集　　大藏卿有家

春の日のゆふ山櫻咲にけりあさゐる雲はあらぬ世まで

詠五十首山花　　光臺院入道二品親王

あれはさらをりても花と見えつゝいろさの山にかゝる雲

名所歌　　藤原家隆

春まくらくゝすゝみひくちと世山耕の里の花もめくらし

建保四年内裏十首歌合　　後久我太政大臣

雲のゐる吉野山ひめの花ゆへてかせとそとけてすゝ物

同　　傳法行

そのつくいたりの峯やくまもんとのきにはまた春の色なけ

同三年名所百首　　從二位範宗

みなせ川ちらぬ櫻のうつりさくさ神のあねはまはし

同　　藤原康光

ちる花いくつりまかりなるみなせ川山ずみ雲の多くのはるまで

春歌中に　　後鳥羽院二条

水無瀬山むすびの花の多くかけて春ゆく今は春のよるそなる

みなせの井の花の面影きえそえて花付けり　　土御門院

さくら花ちりをかくてかたくいはに消てかけまれそけり

家集雅経卿春　　安嘉門院四条

なにかとかくはむ春のよのきききかぎりそら霞風

題しらす　　中納言家持

櫻花しさりまりなはのこをそてくしなきまきとめする人

同　　　　　　　よみ人しらず

おほすきいとゝの山のさくら花ちらすもあらなんちりくる　まれ

家経朝臣哥合山寒花遅　　刑部範兼

いとゝ山花の氷もとけさりきまたくたくひも花のかほりしかな

此哥判者基俊云いとゝ山ときゝ侍るの哥合に見え

難しもなし山とよろしき事ともみ侍らぬと右

人の中なる万葉集よりあつめいとゝの山の様も

ちかくありけんなりけりとふみをく待るなるを

らもなかりし作りとや、判者万葉集に見えはま

ところ也のほと證哥にも分明にしとて

御集家花を　　猶金吾大臣

いとゝ山後拾遺夫木抄柳絲たゝきい文字を引先春の錦いちりけり

金槐

春くれはいとゝの山の山さくら風にみたれて花そちりける

建長八年百首哥合　　右近中将具氏

青柳のいとゝの山の桜花やこきませて錦なるらん

続拾遺山吹哥　　民部卿為家

青柳のいとゝの山のさくら花錦のかけにけきをそみる

建長八年毎日一首中　　同

おほろかや雲のいとゝも霞こそまよひし花の錦なりけり

文永十年毎日一首中　　同

中川のいとゝのさくらもうらみ候もとこもかくらん

月次御屏風哥

おひ川やいとゝの山のさくらもかしこ錦の花の錦さ

杜花

古江の流水峯ね

明玉

小塩山神代の花や散まかむむかしもかゝる春の色かな

春三十首中　隆祐朝臣

大原やをしほの山のさくら花雲にして春の色にさかりきせ

御集　三条右大臣

きのふまで大原山の山さくらもかりにおもてちりける哉

家集三百六十首中　好忠

春ふかみ小くらの山の花をみるみかさの山をさしてのこそ

六帖題　正三位知家

明わたる風をたよりにおもふ舟もとまる山にもかゝる春の色

正治二年百首　二条院讃岐

をしなへて手にすめる花とみゆるかな山の末の春の明ぼの

同　寂蓮法師

散くるをしの神よ雲ちりて花ゆへ春も山すさみ

家集懐紙寄花　西行上人

ちりまさん人もをやはしとさしむへきみちをとふらむ花の　村主

家集

後法性寺入道関白右大臣百首

志賀の山春の梅のくひとまた家のことさへさきにほひける

皇太后宮大夫俊成

雲の浪岩こす滝とみゆるかなよしのの山のきくさく川の花

山落花　源仲正

三室山たつ川さくらちるからに春の錦ぞ水にさく

家集　能宣朝臣

古への東の宮の家のさくらもむかしの春やまたさかりなり

○八百五五　をくら山しら花
御集　後鳥羽院御
会ゝ左ゝヘゝ [illegible]

古寺花　参議為相卿

泊瀬野や遠き霞は都にて花の香つたふ入相の鐘

十首歌合若木花　後鳥羽院御製

見渡せは花の横雲たちにけりをくらの峯の春のあけほの

家集ニ
延喜十三年亭子院歌合　たゝみね

わりなくて花見にとまる山いへは霞のたちかくるらむ

若木花中　為実朝臣

植をけし春のゆきもとしまつ小倉の山の花のしらゆき

同　為相卿

鶯のかよふ霞の下のを山花にかくるゝ色はまさ（道イ）れり

待わひし風とはをくれ花の色はむつましきこそや（同イ）

民部卿為家

みよしのゝ山もかすみて桜花ちるてふ山の名にこそありけれ

此寺は花のしたひもとくの山のまきてきか鐘

のそける人は花のこゑまつけてつかりけりとこそ

弘長三年住吉社三首歌合暮花

白雲とよそにはみえて帰るも遠里をのゝ春の風

前大納言為氏卿

同　法眼源承

桜さく遠里をのゝ春霞さかりに花の下風

同　法印定源

名も香もつるゝ遠の桜むものゝ春の名をそみつ

同　民部卿為家

あさくらと吹くる風の花の香や遠里をのゝかゝるしら雲

行家卿住吉社哥合　松間花
神垣や松の木の間のしらゆふやはなもまよひの桜なるらん
同　或説隆弁法印
見わたせは松のさかえも霞にて遠里小野の花そさく
影にうつす
人丸
住よしの里よりみえてかすみあへる松に[illegible]
宝治元年住吉社哥合　法印定為
あまのはらみるめもあかぬ住よしの松に桜やはなさかん
家集　忠盛朝臣
浪路ゆく磯のさくら咲にけりよせてかへるなみとの
中務の[illegible]　塩風
住吉の松にひめ雲と花をまとふや塩風かすむ浦の遠山

吹黄花満山　従二位家隆
みるからの尾上まてかへる花の色もあつまの松にみどりも[illegible]
文永元年七社百首　民部卿為家
春きえてかはるもの[illegible]けれは桜の花は木末[illegible]
経宣朝臣
以下四首ハ寛政板本ニ集ナシ　思ふ所あり集
かはらさる花よ桜の花はいつてさかんとこそきく
此寺も桜の花にさきにほふ花のさかり
みよしのの花もさかりの花をさけるそ尋ても
え[illegible]とも[illegible]
一条大政大臣家障子絵風の若菜を
東路の野辺のうちの若菜をつみてかさく花をまつ
八千代よるこの色にさく花も万代の春のたえせん

花の色もときはの松にあらなくにあはれはかなくうつりけるかな

家集　為仲朝臣

うき旅の花をたつねてみちのくのさくらもあくこともみて帰る

建仁二年哥合　三位忠定

すゑの松まつしまの花にさくらなみこす風もふくな

家集　俊恵法師

風をいとひきのふもけふも山寺の桜はいまそ散らなん

百首哥　寂念法師

桜あさのをふの浦風に世よわりそめぬくれの花は

建長八年百首哥合　前大納言顕朝

鶴山の尾上のさくらちるなり風よおちそへよ千歳のこゑ[illegible]

洞院摂政家百首　花　光俊朝臣

波間よりみえしも波の花なれや[illegible]山

寛喜年中詩哥合　従二位[illegible]

さくら咲く[illegible]山[illegible]波の花の[illegible]

元久元年詩哥合水辺春望　醍醐入道前太政大臣

里わかぬ花咲きにけり[illegible]　前参議清輔朝臣

同

[illegible]の[illegible]花[illegible]

新葉[illegible]　後京極摂政

はる水やそこら川にせきとめて花の香にやまをちらせ人

洞院摂政家百首哥

隆祐朝臣

朝日山ふもとに咲花のなみこそ宇治の川なみ

百首歌人家

法印定海

ゆきかへる逢坂山の山風にさそはれゆく花の香そする

題不知

藤原基隆

たかしの山の桜や咲ぬらん雲のそらまて木にかゝる雲

文永二年七月白河殿七百首

古来歌合

右近中将具氏

立かへり桜をてゆく人さくらむ衣のさくらも有明の空

円空上人のもとへつかはしける

前大納言為氏

花もまた咲ぬときさへ侘人を身をも深草の里

円空上人

咲そはむ心もちきりしむかし深草の花の都の人をまつらん

大嘗会悠紀方御屏風

前中納言定房

やまと川のほとりの桜ちらくまそあれもなほさきにけりは

万葉

家集

俊頼朝臣

遠近に花咲ぬれは路もせのみちのきたの花とこそみる

家集三百六十首中

曾禰好忠

浦もしや清見の山のさくら花むらさきめてとめてみても

わさ苗を富もる人は波を田面て我かそ花みぬさき

白(?)風雅雑上　此翁(?)
あさましきみなと
まれ(?)なる花
みな人になりぬべきかな

春の哥中　　花山院御製

いしもれる瀧まよひてみる山のさくらをみれは花の白雲

風雅雑上

家集　　西行上人

木のもとに侍けるを見つる山のさくらの花を翁

此哥はあるらまうりて侍けるに花山院の御人て

木のもとにおもはきおきあまりさくらの木のもとに

侍ちて十かへりとてすえしよ侍ちまてまへん

春思ひ出侍てらみけつとそて

為忠家後度百

家集雑上採　　源仲正

霞こもる野をのこる柳よ風ふけは花ちるさくらの山の白雲

越路侍まゝにせきひけるは　　後鳥羽院御製

拾遺集無之
六帖にあり
哥さく

いさゝて世は色ある人と山の桜もさかせめよて

十二首哥中　　和徳門院

見ても世も春をせきてもそれはつ花をしたしみをしみ

六帖題哥にさくら　　中務卿のみこ

親王イ

家にいそ咲ふ山のひさくら花

同　　民部卿為家

現存六

春をやくはらは散りしまてひさ

同　　正三位知家

春きて二目かをわするゝのはなのひさくら花の

イ家

家集　　みつね

六帖作者先

あをさちはつの山へみつひさくら花

同　　人丸

十五 ゆふ月夜はつ咲花を手に折て ちるとりみえすひさしき

新勅撰 春下 同
春すきぬ山の桜花こそやくもれ ちりを待ら

洞院摂政家百首 山花

従二位頼氏

散る人のなき春のさひしさも はなや花の色をまつ

賀茂社百首歌の中 慈鎮和尚

梅か枝に桜の枝をさしませて 花のなりまつを手ひと

建保三年名所百首 正三位定家

浪きよき玉島川によこりまて 春のひかりを花によみぬかく

百首歌よみ侍りし 藤原為家

なかまちのこのはいとまにうつろふは 春の花にみえつつき

建保二年名所百首 前中納言定家

新古今 羇旅

末遠き春の日の影もしらかはく 代の花のまよゆき

ごうおもしいはまの坊にまちのやま 花のにしきのひとしきを

同 正三位知家

さかりなる花のちひゆか春けて とのかむの山風ぞふく

同 順徳院御製

ちるとしよるひきかそしゆふさき まへの山に花をちる

すそのかつみの山きまちるはなよ 夜の中よもまれぬらん

同 正三位知家

まひつつはゆめこそわあちるはなの こるもつきるの世

同 従三位範宗

ちるをのはなをひまけてかるもしても まのこころ

建仁年首歌合 羇中見花

後鳥羽院宮内卿

恵のたちもとぬるかめる花ちる比のつるやさくら
あつさまくり待らて　前民部卿雅有卿

よみちせし天津付も立そはく花よ秋は後きつの山越
家集にうつのやてちは桃李もたくして錦繍
若の花としのりしきひに和華山よみちさせ
しまかくいさくく山をうつりしそて

千五百番哥合　後鳥羽院御製

花さき匂ふとあるの山ふかく人ん風らしも人の漢水かつ吉野のゆふ風

六帖題にさくら　信実朝臣

新十六
いもうろくへもしへささきのかいとさくら花のゆふものいろもまこうし

永久三年十月兵部補て家にて人合さくら

藤原宗良

朝霞へさつとされはくれいたの色をかすむ山さくらはな

天延三年三月は侍ち太政大臣家三の合穂

藤原惟賢朝臣

わよ山くそみゆ山てゝ花おめさ人色をありそめて行

花三の中　西行上人

紅乃色にむらしの春しきくさ花の白はなにつら吹哉

永久四年六月八日入道太政大臣家哥合據

徳大寺左大臣

花さかりすその松山風ふかはかすくれ色は井よ流て立けり

光明峯寺入道二品歌よみはへる五十首山花

従三位範宗卿

くもゐ井のゝすゑにさくら咲けり白雲のたなひく空にまかへて
老若五十首歌合　寂蓮法師
山のはもいつのまにかは雲とみしはなのさかりのあけほのゝそら
千五百番歌合　京極摂政
桜さくとを山鳥のしたりをのなかなかし日もあかぬいろかな　同
ありまの山下の水の氷とけてゆく花の色そいろことにみゆる

月

春や花をちらすや嵐はしらねとたゝよさむの春風
権大納言忠良

家集寺山むら　後頼朝臣
まさきちるみねのあらしをかせにまかせて[illegible]
久安百首
待賢門院堀河
三輪の山まつのはしろくなるまてにうつろひゆく花のしつえを

建保三年五首百首　僧正行意
家鳩やことしの桜の花のにほひをちりそめてをしまれける
家集　法輔朝臣
かりかねのふみかよふ路の花をちりそめてとはゝや
久安百首　大炊御門右大臣
みなみの桜の花をゆきかとみてちるやまさくらかなしくもあるかな
長治二年五月三日俊忠家歌合　式部
前秋法師
東雲のをのへの山の花をさそて雲井をゆくかり
家集巻三の中　従二位家隆
見わたせはあさくら山の桜花ちりまかふそのよそに見る
建保三年内裏詩歌合

従二位行能卿

花のさく木すゑにかけてまくもりこゝろよをしらみの川風

同

春の風はなをよしのゝ山さくら花とともにすゝむ開のさは

従三位範宗卿

家集開路桜

みち行人とゆかりなりけりさくら花まちよふの開ちる

光明峯寺入道前摂政家五十首

参議雅経卿

折しもあれ花さそふ風ぬふえの高山さきこゆる春の嵐よ

百廿八首詠哥

藤中納言定家卿

さくら花よはのかけそめて春そふく風そひかるゝ滝

貞永二年百首哥 庭暁落花

民部卿為家卿

あかさりし庭の桜をたちはなれてなをしもつらし有明の月

百首哥合 慈鎮和尚

おほろなる月もかすみの夜ふかくも花の光のあけほのの山

百首哥合 順徳院御製

ちりかゝる花はそなたの大原や小塩の山の清水なるらん

まてしはしひのくま川の春の風ちる桜のかけをとゝめん

天福元年洞院家々哥合

花のちる山の麓のさくらいは日をへて春をせく入りなん

よみ人しらす

承久二年百首哥 従二位家隆卿

ちりかゝる花もてあそふかり神風や五十鈴の川の花のしら浪

亭子院三月会 花櫻　よきさせ

ほのかへいさ之りみんかさらぬにもさくらちるは　なり

家集　大僧正行尊

秋のみさしあの嶺の堀尾にも花さそかすみのあさわれ花そ

百首三の橋も見も花も　小侍従

ちる花をやさしあけの下風の風かへい籾よ木ましりさせ　よ

弘長元年百首　民部卿為家

あつりし花の陰とえてぬまよけらきさ世川みえ花のきまとい

嘉禄元年三首 吉野山花

春風も野をのくまえてなまてとのまもうつく花をちりつ

定家卿吉野山花

従二位家隆

さくらかりしつけらん今はたつの野をのくこま花もちりぬ

建長八年百首哥合　従二位行家

風さそふ猶霞ふきわたる花は枝より更に表のそ雪

右大臣 百首　民部卿為家

岩の上の庭のちり花いくそ嵐よつもそかりけらん

仁和寺にまうて河上花　前中納言定家

三家の川きよりおもつくさくらもまた入の陰のえやせ

承久二年四季百首三　同

さくら花のうつしもおも山のも寺の花さ神まちりつ

文集百首 花落城中

春の三月入日の陰まうつく人もまをかるくもやちらん

△新千春下
詞書のこと
摂政右大臣
より出家後…
吹風に…
枝の花を吹く

枝下花落稀　　大江千里

吹風に枝のもろくもぬけはちりつる花たえずまきそ

春暁山花落之宴

あさけさき春の山色よ花のちりこそ…咲けれ

徐開何處出宮春

ちりゐる時を求めていつくまち花のあたりをたつねゆかん

○千載春下大納言長家
…花にちる花…
…ちりさくら…

玉葉　新千春下

平定文

風ふけは花咲ることをおもひやりこゝろさへもちりつゝそある

續集中

花山院御製

春雨のふりなかりせは花を翔さむよけさいをそまよはむ

かけみたく花をみくらめる

中務

○史記孟子荀卿傳…
…
成蹊
…

雲葉

さくら花ちりふく風は…のさとよ宮あかし

家集春歌中　源重之

うくひすのこゑもよるへき…花のかな

ひとのなの僧の王のおもふけるを…ときりも

堀河右大臣

さくら花半宮上處にさきてや風吹かてもちらしと思ふ

傳後

らそ人もしらす

採花井宮上處にさけるをたれかいつく宴せん

又傳のめくへつりける　堀河右大臣

採花井宮上處よりさくら花をのこすきかりて見ん

傳のこし

見人もしりけ　せん

かさみのあまりいをもの…きつきりもかとの花をいつく見えせん

家集　ちるころ山のさくらをみて
恵慶法師
さきにほふ風もちらさぬ山桜いさ庭とりてゆきてみまし

家集　庭上桜　源仲正
かくやらむ詞もかさぬあるしの庭もせにまさくらの桜かな

花十首中　修理大夫顕季
庭さくらまたの山のはにさきてふりしをよてなをちらす
うすく桜といふは人のときにさかりけるは

権中納言定頼
山桜やけ山まきつゝうすく桜くまの山にさけるは

春三首中　同人
さくらさきあらしの庭は花をさかせてみれは

家集　渚上桜　源仲正
塩風にをしの海の桜花せにてなきのうちにてあるそみえ

浦路桜　源仲正
浪よするかはらのまちりしく花のふへとこらしてかめ春の山

西勝寺の桜松風にちりてそ

能因法師
ひとの桜をきてぬつみにかつ人は松風にちりぬ桜

御集　春哥　堀河左大臣
むかし山花の桜をちりて桜柳をさかてわきまて

堀河院中宮上総
春風のふけは井のうちにちるさきをなくしてを

此三首は家集云中宮上総　桜のちるを見て

かくれなよひのかきりを縄結にのもとにうらむ
ちりさらなにをれのかさよ入ぬとこせさらむ
といよめれとて

久安百首　　上西門院兵衛
ちる花の手すさのかへよなこらむとても春のとゆり　とめん

百首春歌　　六条院宣旨
春雨のふれくの山はちる花も木のもとにたちそ　ころ
花のもとにやすらひそのふ

俊頼朝臣
桜花ちりかふ程をたつねけてわかふるさとの梢をそ見る　ころ　柳イ　桃イ
おなしく事有けるに大貳長実のもとへ　同イ
けるかな

山さはやさちる上林大なにとむひとりまて
斎院に人々まいりて歌よみけるにほとゝきすいりてよめる
権大納言宗家
春風の花さそふしらぬ山まてふく宮のあたりを　河をら
家集春三の歌中に　同イ
石見野やはるの宮ちる花さそふたつの山に風もなし
新庭三年住吉歌合　　左近中将公衡
住吉のねの桜をかさしても人をまもやるおほかたの人
家集風雅落花といふ事を
西行上人
山さくらえたにきる風の名残なく花をさなから我物とはせむ　山家上　同イ
花歌中

風雅下
大鏡の之女
[illegible]

ちりくともみえくさしのいまはせむしらくもとまりて花の
折ゐたる雲の花にちるをやむかせとよ
風ふくと見えぬ雪そちるなりまゆ柳の

文治六年女御入内屏風山野人家に花
盧暖ゐ花
皇太后宮大夫俊成
暮の雲井の霞もかりはなしくきよもいて宿と
御集落花
中務卿宗尊親王
色うつる世の花のはじめさへわかしとやいはせん
花月百首歌合
後京極摂政
秋は又雁の行つらにうつる花の尾上のまにまにしらせて一村
色もちかくまつはしる世にわかぬ桜をともしてかさねし人の花をとゞめよ
西洞隠士百首歌の中
風

かり人のいる野の霧を命にてちりぬる花はさきのちぞなき
仙洞五十首歌の霧中花
桜狩する花の下風さそひ来てたえぬの山のかすみそ花
建仁元年十首歌の霧中見花
土御門内大臣
よもすがらかすめるかりもそ花の宿よい宿から
判云為家たちしもはれくも花の雪けもすまんや
又かれるはよ桜をしとよきもしとこそ云判
承安元年仙洞詩歌合に花下に遊覧人
前大納言為氏
雲とちるかなかきみそきえくまでありまたなき花のかたに
同年百首
法印定円

新続古今雑春

かた野なるなきさの桜いく春かちらさてとふや宿はさくらん

建仁二年内裏詩哥合河上花

参議雅経

ちる花のそのまゝあはれ名取川かせにしからむ春のみなと

洞院摂政家百首花

従三位行能

とまらしの花は別をおしむまて風のうらみも春やなからん

同

春くれはいつまて花をかゝるらん雲をもさくらなる山

従三位範宗

亭子院歌合

伊勢

水上の花の杜のはやくしもこそちりの色やみえまろ

石清水若宮歌合

後鳥羽院下野

谷水をよしのゝ雲に花とそふらつゝきさる山

家集桜

清輔朝臣

千春上

神垣のみむろの山は春きてそ花のしらゆふかけてみえける

新撰宝治百首

民部卿為家

咲ぬれはたかまの山の桜花たえまに年はかゝる村雲

同二年百首

みよし野の山をや花のつゝむらんそともしらぬ雲の下水

貞応二年南殿百首河上落花

みよしの山下風に花やちるらん立田の川は流てかはる

御集中

後鳥羽院[illegible]

みよしの神の桜に春かけておしめと思ふ花やちるらん

元久元年詩歌合水郷春望

[illegible]

あさつまや雲のはたても花のかにゝほひぬるさくらの風

建長八年百首歌合

衣笠内大臣

岩さくらひらの山のみつゝてうつろふ雲や桜なるらん

永万二年重家家歌合花

従三位頼政

新続古今春下

あふさかやまのこゑよりきてひのもとの花とみゆらん

雲葉

春花三首中

後鳥羽院御製

花さそふひらの山風ふきにけり桜によするしかの浦舟

百首歌

寂蓮法師

家集花

はるゝ咲ひらの山風吹ぬらし花の浦ゝのさゝ波

千五百番歌合

同イ

雑部拾

[illegible]

志賀のうらよ花ふきさそふ浪清くかへるあさや神の御舟

正治二年百首

民部卿範宗

櫻さく志賀の山風吹まよひよせてかへる花のさゝ浪

家集花三首中

権中納言長方

桜咲比良の山風ふくまゝに花のさゝなみよする水うみ

同

土御門院小宰相

海はれくひらの山風かへりなむ花をまきのさゝ浪そくる

弘安元年百首

法印定円

志賀のうらやかならむ浪のはなよせて花の舟さゝ浪の上

家集山路花ちるとて

西行上人

玉葉春下

ちりまかふむら花の初雪ふりぬれはきくもき志賀の花園

山家上

春風の花のふゝきにうつもれてゆきもやられぬ志賀の山越

正治二年院百首　　従二位家隆

ちりまかふ花のゆくさきはかきくもれ雲まてかをるしかの山越

六百番哥合春曙山　　慈鎮和尚

拾玉三
みちとせにむかしの[illegible]かさりにて[illegible]てしかの山

御集神祇花　　後徳大寺左大臣

神垣にゆふかけてみつしかの浦[illegible]桜[illegible]

永久三年十二月大神宮祢宜哥合桜

よみ人しらす

[illegible]みやしみの花のさかりをいつすゝの雲のよそにこそみれ

家集百首中　　源有仲

春の来るちるさきしかたなまてか[illegible]しかの山

[illegible]

家集　　権僧正公[illegible]

ちるはなやかをみるもかのもにうつる山にふかきよ夜[illegible]

久安百首御哥　　崇徳院御製

おとりけや風のふくさく花をふ[illegible]にほひさかりも[illegible]

百首御哥春　　後徳大寺左大臣

大井川ゐせきのいつるまつの山風の花のさかり[illegible]

御集落花　　通光公大臣

春るゝ風の山の[illegible]てむさとくらまにうつるのは[illegible]

春三の中　　民部卿雅有

吹わたる春の風の山風より[illegible]の花のしら浪

弘長四年毎日一首中　　民部卿為家

しらくもはそてにこほれし嵐山あらしのさとの花のさかりは

花月百首　前中納言定家卿

春風の霞ふく山のふもとよりみれは花の香峯の松枝

同

花さかりさくらの枝に露そひて風にしたかふ雲のうへ山さくら

風ふけはそのゝ雲のうつろひてそらに花ちる山桜かな

後京極摂政

西洞院士百首法師

花の浪まきさつ山下すその松風にさそはれ雪のちるらん

洞院摂政家百首歌

後九条内大臣

ちりぬるも水のみなかみのさくらの雪のうきのさくらにし

同

民部卿為家

霞さへ春の山すその花すそのさくら花はまれにちる

続集花の木ともあはれとさそさせかふらて

花山院御製

木立をはなれてすくれてさくらかつくれなゐのよそへらる

奈良花林院哥合　基俊

三吉野は吉井のさくら花をそやけにしらくもの色にさく

永享二年十月三日哥合　花

前大納言隆季卿

うらやましいなの浦の花のしほ風に花もちるらん雲のうへのあか

建長八年百首哥合

信實朝臣

花の色をたかくなのみまさむとていかてと思ふ山桜の

同　　　　　　　　　正三位忠定卿

なをあかしよしのゝ宮とのみきゝてしかはなれぬ花桜かな

同　　　　　　　　　信實朝臣

花の色は千とせをふくる春風のちらぬ桜にゆきまよひつゝ

弘長元年百首歌　　　前大納言為氏卿

雲のいて霞のぬきにをりそへて花にしきの名をそさらせる

千五百番歌合　　　　前大納言忠良

み吉野ゝ木の末のこすゑにかゝる花の雲井にまよふ月

百首歌　　　　　　　寂蓮法師

朝緑千すみのまとへ桜かな花のさかりの春の色かな

家集　　　　　　　　正三位忠定卿

たのみそきさくらの雲にはなもなく桜さくら春の山風

守家進て家集に　　　法橋顕昭

いつまてか花をみるらんとおもふにもむかしの春やしのはれぬらん

千五百番歌合　　　　前内大臣

花ちりぬとやいひもてゆくらん春のかきねの山はくれつゝ

後京極摂政歌合花隔山氣色　隆信朝臣

ちりまかふ花のはなにこそまかへけれ山の峯よりをちの桜を

花月百首　　　　　　前中納言定家卿

雲のたつ春の下かけくれぬとも花をはなれのやまのはの月

建久元年百首

ちりてなを花やはかなきみよしのゝ吹きかへしのあらしにもみゆ

建暦三年内裏詩歌合山居春曙

壬二中

從二位家隆卿

櫻色の千すゑの山のかみさかきときはにさくら宿のはるかな

題不知　　清輔朝臣

唐國の虎ふす野邊に入ぬとも花の下には猶そやとらん

久安百首　　皇太后宮大夫俊成

いか計花をは春とおもひしも人のゆくへはおきさりにして

家集花歌　　西行上人

うき世にはとゝめおかしと春風のちらすは花をおしむなりけり

〓〓〓のこよなき床の花よりもさきてつもらむ宮と

春毎に花のなきをもあはれとちりけれ

建保二年入道二品親王五十首歌合

常盤井入道太政大臣

このまつる人のこゝろもさくら花ちるをまつとはしらぬあはれさ

百首歌の春の歌　　從二位家隆

まち人かきけふりしもあさきさくら咲かね

寛元三年結縁經百首　　正三位知家

岩の上の庭のちり花いとゝこえりわかれしいまつけてありけるらん

御集庭上花　　後九條内大臣

岩の上やむかしもちりし花をかはまた春の庭よ

春御歌の中　　後九條入道關白

わかやまのこゝろひとりいけなるの中に花の風は吹

御集深山花　　中務卿みこ　宗尊

さひしさのやまのおくにもさくら花ちりさへもせしはなやまほらん

正応二年毎月一首中

民部卿為家

咲花は錦をかくる立野山柳の糸をたてぬきにして

家集　西行上人

まよひこしたつの峯のむら雲さのあらんのまさるや

此春の宰相は御子みちの登よえし侍て

まいりていそきふりみのこしむものおやの上つけ給とて

高野にて侍ける比草庵にて花のちり侍けるを見ては

ちる花の庵の上をふくならは風いるましくめくらさん

家集西中落也を

糸つ雨にさかせてちる花のおりきにをあるかたつらん

家集落也　源仲正

おりしも風のまきをまねく花のいろ

かくれなしにむもちらされはそてさへ花をとらへける

時まちえ末の松山こしぬれの花をそへても人はあかれす

建保三年名所百首　従二位家隆

月

春風にすゑの松山浪こさはちりしも花のちらすそありけん

正三位家衡

花盛　後九条内大臣

くもらさ人の来さる庵の山風はあるものためてちる桜か

家集　俊頼朝臣

おりて見ん霞のうしくちる紅の花もも風はえて

風をいとふころこの山もちるもやありけん神の名持ちるこ

文永八年毎月一首中雲を

民部卿為家
しら雲や桜にかゝる木の間よりやよひの空にはるゝ白雲
弘長元年毎月一首中三月二日宮のまりにて
山桜花の盛になる宮古はちるを見るらん人とたれなし
同三百首の
このやね花の下紐とけつゝやよひの空にむすふ朝霧
正嘉三年毎月一首中
浄手むすふ手のしつくに宿る月の影のうちにもたえぬ花の下紐
六帖題　光俊朝臣
あさいらし木の花ちりて谷のうちの散まかふ風は桜なりけり
同　信実朝臣
ちるをしみなからも峰に吹風をのかれぬ枝や春の山風
秋されやくもゐにたかき山の端に雲ゐのよそに見る桜かな
千五百番歌合　大納言通具
桜咲やまぶきの山のさくら花風もおさまるよにはちりけり
建保三年名所百首御歌　順徳院御製
桜ちる花の下風あまの原花をよくのはる風の山
同　正三位右衛門
思ふ山みえきて花さかりひとりきりもよの木風
同　皇太后宮大夫俊成女
をのまのこえもや独きの山桜さきにけりな高嶺の雲
文治三年百首　前中納言定家
さくらさくや高ねの山のさくら花風にまかせてゆくへ知らねと

○遅月

六百番歌合遅月　後京極摂政

秋ならて月待峰のうらめしさくらもかくや暮の山さと

同　大蔵卿有家

夕暮はとへはけさの朝の千すとよをへそてさらひらしそ（とも迷）

同　前中納言定家卿

なかめよひあけらのそらまちすむ（朝）よ花さく山まちをわる（かイ）

同　慈鎮和尚

雲の上はまつはのそらも心をつきて秋のとけき暮のかよ（待と）

同　正三位経家卿

暮の月のなくさめかねつまくらみえひなすそひかね（雲らん）

同　隆信朝臣

くつはかなしいてゝき暮の月をのとけき物とおなと見ん

永久四年百首暮月　仲実朝臣

百とせにはたらつ暮まちらくと来もかつえくまつつのを

建保三年五月百首　前中納言定家卿

（於内裏歌合中）

橋乃上の秋のはそとは月のかとはつゝかさとのひくのか

同七年百廿首詠之（同イ）

（於内々中）

月まちそくしいさ時まちて暮の秋のいりあひのかね（鐘）

民部卿為家卿

花はへよあふはくにくあの月もおなへ心のいそかれん

○春月

百首御歌の中

後九条内大臣

家もちかつまちのも月にみそいくなひさしき（さびしきイ）ほとゝ也らん

あさき衣のかれしへのころのおもきの月かけ

洞院摂政家百首遂恋

家長朝臣

よのなかのあはれも月のかけもさりおもきのくもかくれ

建長三年毎日一首中

民部卿為家

あはれなる身のうきひとつをせめてはおもふもかな[illegible]にしかすむ月かけ

正嘉二年毎日一首中

二[illegible]おもかけの月衣のほとりそへてやまもまた

月影のおもかけにすむそてのなかにかさして[illegible]

くもゐのそらにふかきやまのはにかゝりてゆふはの月はけ

武蔵守(?)家[illegible]

参議為相

いくひさしきのやとにけさ[illegible]しるおもかけのあき

千五百番歌合

後京極摂政

ふしみやまそよくまつの[illegible]さえてすめる月よ秋そふる

[illegible]ときのよるのなかはにけさのあきの月

[illegible]やましたの風吹てたちまちのよはの月

[illegible]集春歌の中

宮こおもふかりの月かけおもひきさむるよはの[illegible]

四季百首春歌

前中納言定家

きみか代はよろつ代かけてしらぬ[illegible]のみちのそらの月

六十五韻宮こ[illegible]の節屋[illegible]風[illegible]細馬

手お尋

前中納言定家

金葉 式部卿 曉けん為待 日下
うきことを ... やがて ...
よもしらぬおもかげの月はすみのぼる峯の原をいさ立ちかへら

三春菩節傳蓬萊郷躑躅折開乘宿露風　語人

花ゆへすむ山のいつくをききてこの浄土の月をけふまとふ也

春中　新撰風　前大納言為氏

新撰
こよひさへ春の霧の閑ならぬ月来ぬ君をこふらん

禖子内親王家歌合　霞月をよみ侍りける　宣旨

見わたせばかすみの色はひとつにてあかぬ雲の月

詠月　よみ人しらず

春さればさかりの夕月夜ふかく
かすや山陰にして

六十一云 春の木陰 春月夜
五百三十三首

寛永十三 霜月八日
以他本校合了

110X
495
21